

VIEWnext

先生方と共に創る 教育情報&オピニオン誌

[ビューネクスト] 高校版

2025 **1** January 2024年12月号・2025年2月号合併号

特集

表紙の学校
大阪府・私立
宣真高校

生徒の学びの機会を どう保障するか？



今号の掲載校

大阪府・私立箕面自由学園高校 / 北海道高等学校遠隔授業配信センター / 宮城県・仙台市立仙台大志高校 / 岡山県・私立岡山理科大学附属高校通信制課程 / 島根県立浜田高校 / 島根県立浜田商業高校 / 島根県立浜田水産高校 / 宮崎県立高千穂高校 / 山形県立鶴岡中央高校 / 東京都立両国高校・附属中学校 / 新潟県立長岡向陵高校 / 北海道当別高校 / 埼玉県・私立西武学園文理中学・高校

先生なら、 どうしますか？

教師は、生徒の「どうあるべきか、どう生きていくか」という答えが1つではない問いに、生徒とともに日々向き合う。教師としての指導観を問われた「あの瞬間」を、当事者の教師が振り返る。

虚勢を張ってきた私が、
問題を起こし続ける生徒に
「君たちを信じる」と伝え、
まず自分が変わることを誓った

大阪府・私立箕面自由学園高校
大東範行

おおとう・のりゆき ● 同校に赴任して9年目。
地理歴史・公民科。世界の様々な問題について
探究する「グローバルリーダープログラム」などを通じた
国際理解教育に力を入れている。

30 代半ばまでの私は、廊下ですれ違う生徒が身を硬くするような厳しい教師でした。厳しくする理由は曲がったことが嫌いな性格にありましたが、生徒になめられたくないといった思いも根底にはありました。そのため、校内での生徒の行動や容儀について厳しく指導し、生徒を管理する存在として虚勢を張っていたのです。

そんな私が、ある年の2年生のクラス担任を務めることになりました。そのクラスには、校則違反の常連の生徒も多く、実際に1年生の時に生徒指導で厳しく接した生徒が何人もいました。「あの子たちと毎日向き合うのか。これは一層厳しく接するしかない」。しかし私は、すぐに考え直しました。生徒たちは叱られても同じことを繰り返してきました。担任になった私がさらに厳しく接しても、溝が深まるだけではないか……。

担任としてのあり方を何日も考え、たどり着いた答えは、「自分が変わる事」でした。叱られてばかりの生徒たちは、承認欲求が満たされていないはずだ。私が彼らを信じ、味方になることで、彼らが変わるかもしれない。そう考えたのです。

始業式で担任が私だと知った生徒たちは悲鳴を上げました。クラス開きの時に戦々恐々としていた生徒に私は、「君たちのことを信じる」と言いました。保護者会でも、「子どもたちを信頼しましょう」と保護者にお願しました。

もちろん、校則違反を見逃すことはありませんでしたが、頭ごなしに叱ることはやめ、生徒の話を聞くようになりました。また、生徒をよく観察するようにもなりました。あのグループはいつもゲームの話で盛り上がっている、あの2人は最近仲よしだ……。そうした、今まで気にもしなかったことに目を向けるようになると、自然と生徒が話しかけてくるようになりました。

校内での私のクラスの評価は「騒がしい」から「明るい」校に変わりました。不登校気味の生徒が毎日登校するようになると、同僚は「何があったの？」と驚きました。生徒になめられたくないといった私の気負いもなくなっていました。

私はそのクラスを2年間受け持ちました。難関大学に多くの生徒が合格したことはうれしかったですが、「大東先生のような教師になりたい」と、教職を志す生徒が現れたことも喜びでした。その生徒は今、同僚として私と同じ学校で働いています。

およそ20年前、鎧を脱いで生徒とかがわったことで、私は今も教師を続け、やりがいを感じることができています。

大東先生が指導のスタンスを変えることができた理由と、現在に至るまでの成長を、大東先生に憧れて教職の道に進んだ教え子の声を交えながら紹介したウェブオリジナル記事を、ぜひご覧ください。



<https://view-next.benesse.jp/view/web-hs/article30304/>

巻頭 先生なら、どうしますか？

虚勢を張ってきた私が、問題を起こし続ける生徒に
「君たちを信じる」と伝え、まず自分が変わることを誓った
大阪府・私立箕面自由学園高校 大東範行

2 特集

生徒の学びの機会をどう保障するか？

- 4 **課題整理** 現代の高校生の「学びの機会」はどのような課題に直面しているのか
- 8 **現状把握** 学びの機会を保障する取り組み・制度
- 10 **遠隔授業** 北海道高等学校遠隔授業配信センター
- 13 **定時制** 宮城県・仙台市立仙台大志高校
- 16 **通信制** 岡山県・私立岡山理科大学附属高校通信制課程
- 19 **地域連携** HAMADA 教育魅力化コンソーシアム
- 22 **地域連携** 宮崎県立高千穂高校
- 25 **本特集を振り返って** 福井大学連合教職大学院 教授 中森一郎 × VIEWnext 編集部 統括責任者 柏木 崇

28 発問・課題設定をキーに見る
主体的・対話的で深い学び 授業実践

28 **地学**
山形県立鶴岡中央高校 五十嵐雄大

32 **数学**
東京都立両国高校・附属中学校 小笠原大峻
お勧めの分掌 管理職 教務担当 進路担当 担任

36 **探究学習 つながり、伴走する教師たち**
新潟県立長岡向陵高校
テーマ 探究×産学官連携
お勧めの分掌 管理職 教務担当 進路担当 担任

38 **事例で深める！ 学習評価**
北海道当別高校
テーマ 「総合的な探究の時間」の学習評価
お勧めの分掌 管理職 教務担当 進路担当 担任

40 **指導変革の軌跡**

埼玉県・私立西武学園文理中学・高校
実践型教育の推進
お勧めの分掌 管理職 教務担当 進路担当 担任

44 **大学入試トレンド解説**

2025年度大学入試の出願指導ポイントと
今後の大学入試に向けて求められること
お勧めの分掌 管理職 教務担当 進路担当 担任

52 **Reader's VIEW**

<https://view-next.benesse.jp/>

本誌記事は、ウェブサイトVIEWnext ONLINEでもご覧いただけます。

印刷製本／(株)協同プレス 編集協力／(有)ベンダコ 撮影協力／荒川潤、岸 隆子、筒井岳彦、ヤマグチイッキ イラスト協力／カモ

※本文中のプロフィールはすべて取材時のものです。また、敬称略とさせていただきます。

※本誌記載の記事、写真の無断複写、複製及び転載を禁じます。 © Benesse Corporation 2025

今年度の弊誌の特集は、「読解力の育成」「定期考査の廃止」「非認知能力の育成」「自己調整学習」といった、そう遠くない未来に、多くの学校において話題や課題に上るとされるテーマを取り上げてまいりました。ただ、それらはいずれも、生徒にとって学校という場や学びの機会が保障されている前提でお伝えしてきたものです。

しかしながら、現在の日本の学校教育においては、生徒の学びの機会の保障が危ぶまれる事態が生じています。そのレベルは、学校や地域全体に及ぶものから個々の生徒の中で起きているものまで様々です。そして、今号でご紹介する事例の学校等が置かれている状況や環境が読者の先生のご勤務校と異なる場合、一見すると、本特集のテーマはご自身とは関係の薄いものと思われるかもしれません。ただ、事例の各校等が向き合われている課題は、その規模や影響の範囲の大小に違いはあれど、本質的には多くの学校で生じている課題、あるいは今後顕在化してくる可能性のある課題だと思われます。ぜひそうした視点で本特集をお読みいただき、自校の生徒の学びの機会を今後、どう保障していくのかという問いを考える一助にさせていただけますと幸いです。

VIEWnext 編集部 統括責任者 柏木 崇

P.4 課題整理

現代の高校生の「学びの機会」はどのような課題に直面しているのか

P.8 現状把握

学びの機会を保障する取り組み・制度

P.10 事例1 遠隔授業 北海道高等学校遠隔授業配信センター

小規模校が多様な教科・科目を設置できるよう、ICTを活用し、リアルタイムに授業を配信

P.13 事例2 定時制 宮城県・仙台市立仙台^{たいし}高校

生徒の入学動機、学習歴、学びの特性を理解し、安全・安心な学習の場をつくる

P.16 事例3 通信制 岡山県・私立岡山理科大学附属高校通信制課程

生徒が学び方を選んで学ぶ環境を整備し、自分のペースで自立できるよう、生徒を支援

P.19 事例4 地域連携 HAMADA教育魅力化コンソーシアム

学校と地域、そして学校同士がつながり、各校が教育活動を充実させる

P.22 事例5 地域連携 宮崎県立高千穂高校

地域の教育資源を生かした学校魅力化を3町と県立高校が協働して推進

P.25 本特集を振り返って

社会のシステムの一環として、学校が社会とつながり、多様な生徒の学びを保障する

福井大学連合教職大学院 教授、独立行政法人教職員支援機構 フェロー 中森一郎

VIEWnext 編集部 統括責任者 柏木 崇

生徒の学びの機会を どう保障するか？

生徒の学びの機会を保障することについて

学校現場の課題感

学校の小規模化



人口が減少している地域では、高校入試での競争がなくなり、中学生にとって学習するインセンティブが少ない。コミュニティーの同質化が進んだ結果、学びに価値を見いだせない保護者が増えている。さらに、良質な私立学校や学習塾、大学等の教育資源は都市部に集中している。教育環境は悪化する一方だ。(千葉県・公立)



現任校のある地域は、子どもの数が減り続けている。今後、学

級数がさらに減り、教師の数も減れば、学校行事等の維持が難しくなるだろう。教師1人あたりの仕事量が増えることで、授業研究等にも影響が出る。それらの問題に対応するためには、教師の配置数の増加が必要だ。

(栃木県・公立)



少子化が進む中で、地域の生徒や保護者に「選ばれる学校」として魅力を高めるヒントや実践例を知りたい。(愛媛県・公立)

生徒の多様化



目標や目的があって入学してきた生徒が、思い描いた高校での学びと実際の学びとのギャップを感じて、学ぶ意欲が低下している例が見られる。(静岡県・公立)



不登校の生徒数が増加している。それに加え、オンライン学習による単位認定がされることも話題になっている。それらの対応が急務だと感じている。(三重県・私立)



通信制課程の教師から話を聞くと、「全日制に行けないから通信制に行く」という生徒や保護者の価値観が変わりつつあると感じる。通信制でも探究学習に取り組み、非認知能力の育成や自己肯定感の向上に力を入れている。通信制のそうした取り組みや心理的安全性の担保といった視点を、全日制の私たちも学ぶべきだと思う。(栃木県・私立)

探究学習等の学びの充実



「総合的な探究の時間」における活動だけで、探究学習を意味のある学びにすることは難しい。もっと根本から変えなければならないと考えている。(和歌山県・公立)



自治体を挙げて探究学習に力を入れている地域もあるが、本校の近隣には大学がなく、地域に企業も

少ない。どのように地域と連携すればよいか考えあぐねている。(福井県・公立)



地域の企業や団体との連携があたり前になってきているが、連携先への依頼や交渉に時間がかかって大変だ。他校ではどのように取り組んでいるのかを知りたい。

(山口県・公立)

生

徒は、様々な入学動機や学習歴、興味・関心、希望進路を持つて高校に入学する。また、日本各地で人口減少が進行する中、一人ひとりの生徒が生活する環境や、生徒が通う学校の置かれた状況、学校が所在する地域の教育資源は一律ではないのが現状だ。さらに、教育課程の基準として定められている学習指導要領や、求められる教師のあり方、学校が整備

すべき学習環境などもまた、社会の状況に応じて変容してきた。生徒一人ひとりの学びのニーズに応え、学びの機会を保障するために、今、学校には何が求めら

れるのか。「学校の小規模化」「生徒の多様化」「探究学習等の学びの充実」の課題に先進的に取り組む事例を通して考える。

先生方とともに
考えたい「問い」

生徒の学びの機会を保障するために、
自校は何かができるのだろうか。

※『VIEW next』高校版・次年度誌面に関する読者アンケート 2023・2024年度、『VIEW next』高校版読者モニターアンケートを基に編集部で作成。

現代の高校生の「学びの機会」は どのような課題に直面しているのか

中学校を卒業したほぼすべての生徒が高校に進学している中で、15歳人口の減少により、学級数の減少など、生徒の学びの機会の維持が困難な地域が既に発生しつつある。また、生徒の入学動機や学習歴、進路などは多様化しており、生徒一人ひとりのニーズに合わせた対応・支援の必要性が高まっている。そうした、生徒の学びの機会を保障する上で直面している課題を整理する。

課題 1

学校の小規模化

学級数の少ない学校では、
学校運営上の様々な問題が表面化

子どもの数の減少が続いている。2010年は約121万人だった15歳人口は、23年に約108万人まで減少し、29年には100万人を割り込む見通しで、38年には約74万人まで減少することがほぼ確実だ(図1)。

高校に在籍する生徒数も減少している(図2)。そのため、各自治体では、公立高校の適正規模・適正配置に関する議論が行われるようになり、既に多くの地域で高校の統廃合が進んでいる。23年には、約29%の市区町村にお

いて公立高校の立地が「0」、約35%の市区町村において、「1」となっている(*1)。中でも北海道は、公立高校の立地が「0」または「1」の市区町村の割合が83.8%を占めている。

1990年からの約30年間で、高校数は全国で約700も減少したが、それでも生徒数の減少のペースに比べると、高校数の減少のペースはやや緩やかと言える(図2)。その分、着実に進行しているのが、学校の小規模化だ(図3)。1991年度からの30年間で、19学級以上の高校の割合は約64%から約34%と大きく減少している。一方で6学級以下の高校の割合は30年間で

2.5倍になっている。

24年12月に公開された文部科学省「高等学校教育の在り方ワーキンググループ」の「審議まとめ(素案)」(以下、「審議まとめ(素案)」)においても、少子化が加速する中、公立高校の適正配置を考えていくことが必要であることを指摘するとともに、小規模校の教育条件の改善が国の重要課題であると述べている。

クラス替えができない、クラブ活動や部活動の種類が限定される、教師の加配なしには習熟度別指導などのクラスの枠を超えた多様な指導形態が取りにくい、そして、配置できる教師の数が限られるため、生徒が履修できる科目が限られる……学級数が少ないことによって、様々な学校運営上の問題が生じる。「審議まとめ(素案)」では、

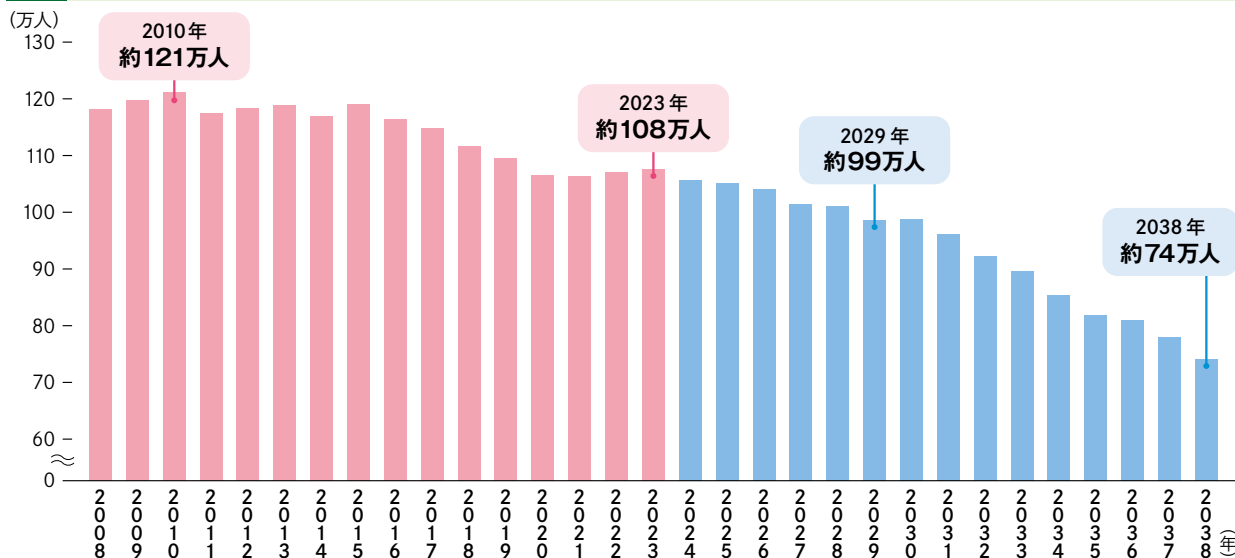
そうした問題の解決につながる取り組みとして、遠隔授業の活用や学校間連携などを例示している。生徒が履修できる教科・科目等の選択肢を増やすことは、生徒の多様な興味・関心や学習ニーズに応え、希望進路を実現する上で有効だと考えられる。また、複数の高校が連携し、それぞれの生徒の興味・関心に応じた多様な探究学習を実施する取り組みも、少子化が加速する地域の高校にとっては大きな意義を持っている。

「審議まとめ(素案)」では、高校は地方創生の核となる存在であり、学校の存続は地域の存続にもかかわる重要な課題と位置づけられている。小規模校の教育力の最大化と教育条件の改善を図ることが、国や自治体、そして学校現場に求められている。

*1 文部科学省「学校基本調査」

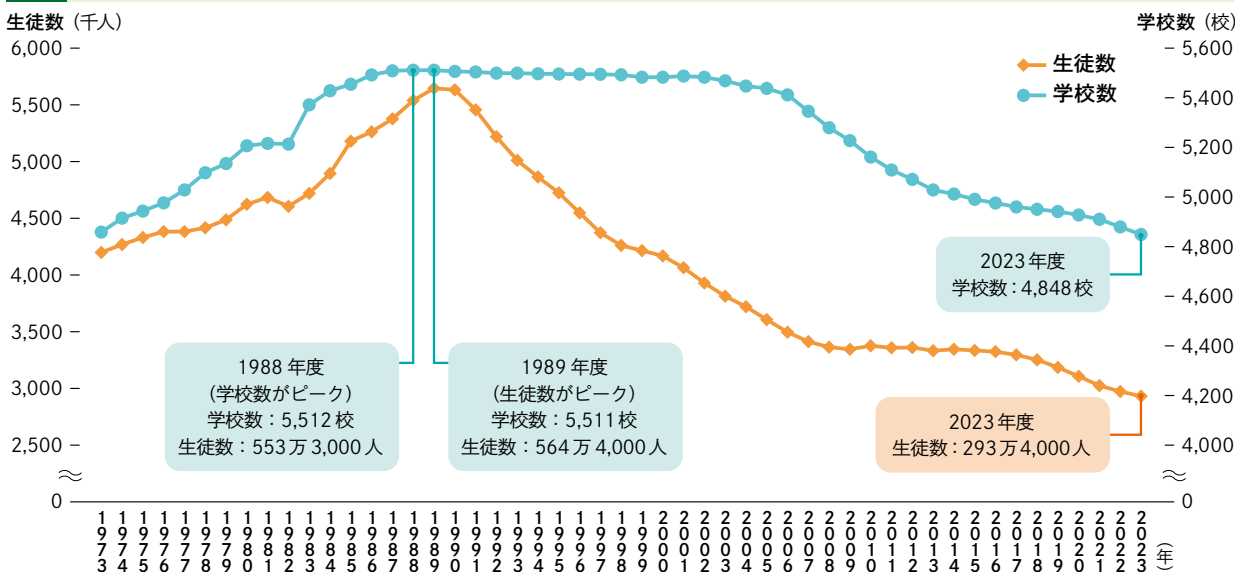
生徒の学びの機会をどう保障するか？

図1 15歳人口の推移



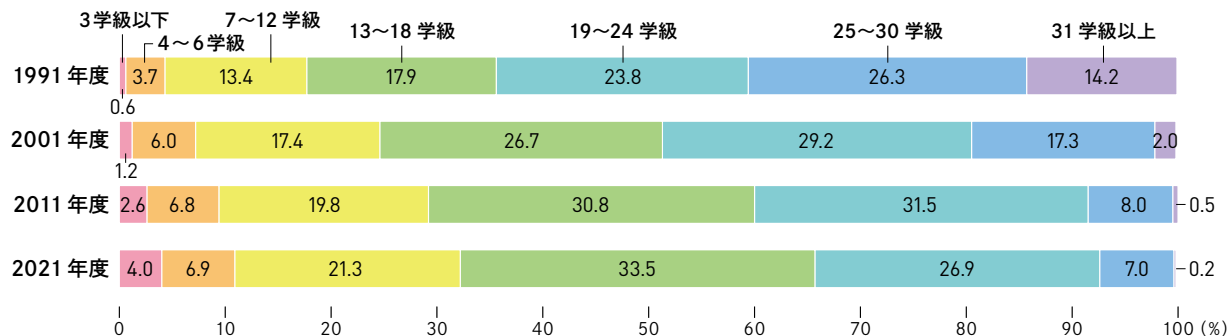
※文部科学省「第15回高等学校教育の在り方ワーキンググループ参考資料3」 ※各年、前年10月～当年9月時点での人口を集計。
 ※2008年から2023年までは、総務省人口推計の年齢別人口より、2024年から2038年までは、総務省人口推計の年齢別人口（2023年10月1日時点）2023年資料より算出。

図2 高校数と高校の生徒数の推移



※学校数、生徒数は、いずれも国立・公立・私立学校（全日制・定時制）、中等教育学校後期課程（1999年度以降）の合計値（専攻科、別科の生徒数を含む）。
 ※文部科学省「学校基本調査」

図3 高校の学校規模の変遷（全日制、公立、本校のみ）



※単位以下を四捨五入等により、合計が100%にならない場合がある。 ※文部科学省「学校基本調査」

課題 2

生徒の多様化

不登校の経験者が増加し、特別な支援も大きな課題に

現在、高校への進学率は約99%に達している。生徒一人ひとりの入学動機や興味・関心、学習意欲や希望進路、そして小・中学校での学習歴や生活環境などは極めて多様だ。

しかし、学校の立地やリソースなどに伴う制約により、生徒一人ひとりの多様なニーズに対応し切れていない面もあるのが実情だろう。特に近年は、中学校段階までに不登校を経験した生徒が増加している(図4)。23年度は、小・中学校で約35万人の児童生徒が、高校では約6万8000人の生徒が不登校となっており、いずれの学校種でも過去最多となっている(*2)。そうした生徒の現状やニーズに対応することは、高校現場にとっても重要な課題と言える。

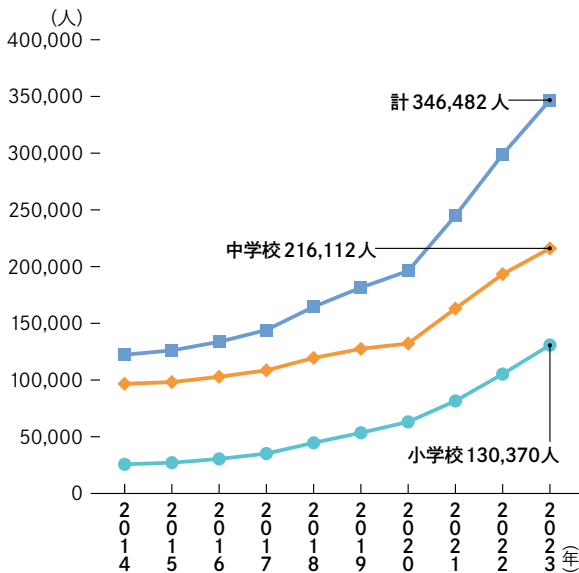
また、知的な発達に遅れはないものの、学習面や行動面で著しい困難を抱え、特別な支援を必要とする生徒が、通常の学級においても一定数在籍しており、そうした生徒の支援は、授業だ

けでなく、学校生活全般において必要であると考えられる教師は少なくない(図5)。学校全体で生徒を支援するためには、校内委員会を設置し、生徒の実態把握や支援内容の検討を行うことが必要であり、そうした状況は各校に整いつつあるものの、該当生徒が十分な支援を受けているとは言えないのが現状だ(図6)。

生徒の多様な能力や適性、興味・関心などに応じた学びを実現する場として近年、存在感を高めているのが、多様な学習スタイルを可能とする定時制課程や通信制課程だ。特に、通信制課程に在籍する生徒数は大幅に増加している。

「審議まとめ(素案)」では、全口制・定時制課程の不登校生徒の学習機会の確保のための遠隔授業及び通信教育の活用が提言された。ICT活用の体制・環境を整備するとともに、これまでの学校のあり方や学校・課程の枠にとらわれず、校内外との柔軟な連携によって教育内容を充実させていくことが求められている。

図4 不登校児童生徒数の推移



※文部科学省 令和5年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果概要

図5 高校で、知的発達に遅れはないものの、学習面または行動面で著しい困難を示すとされた生徒数の割合(学級担任回答)

	推定値(95%信頼区間)
学習面または行動面で著しい困難を示す	2.2%(1.7%~2.8%)
学習面で著しい困難を示す	1.3%(0.9%~1.7%)
行動面で著しい困難を示す	1.4%(1.0%~1.9%)
学習面と行動面ともに著しい困難を示す	0.5%(0.3%~0.7%)

※「学習面で著しい困難を示す」とは、「聞く」「話す」「読む」「書く」「計算する」「推論する」の1つ、あるいは複数で著しい困難を示す場合を指す。「行動面で著しい困難を示す」とは、「不注意」「多動性・衝動性」、あるいは「対人関係やこだわり等」について1つ、あるいは複数で問題を著しく示す場合を指す。

※文部科学省 2022年「通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果について」

図6 知的発達に遅れはないものの、学習面または行動面で著しい困難を示すとされた生徒が、校内委員会において現在、特別な教育的支援が必要と判断されているか

	推定値(95%信頼区間)
必要と判断されている	20.3%(10.3%~36.1%)
必要と判断されていない	79.0%(55.0%~92.0%)
不明	0.7%(0.3%~1.9%)

※文部科学省 2022年「通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果について」

*2 文部科学省 令和5年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果概要

課題 3

探究学習等の学びの充実

社会に開かれた学びを
いかにして実現するか

「高等学校教育の在り方ワーキンググループ」における議論の中で、新しい時代に対応した高校教育のあり方の1つとして求められているのが、高等

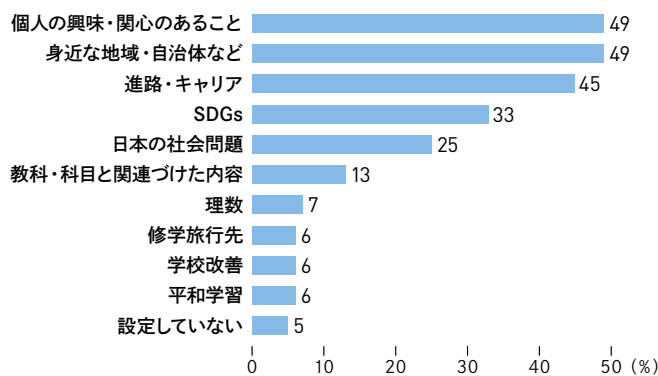
教育機関や地域社会等の関係機関と連携・協働した高度な学びだ。高校段階では、社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる資質・能力や、社会の形成に主体的に参画するための資質・能力の育成が求められる。その実現に向けては、地方公共団体や企業、大学

やNPOなどとの連携・協働による地域・社会の問題解決に向けた探究学習、教科等横断的な学びの場が必要だ。そうした学びの中核を担う「総合的な探究の時間」において、身近な地域・自治体に関することが、特に1年生の探究学習の課題として設定されていることが多い(図7)。また、教師自身も、探究学習を通じた地域との連携強化に、手応えを感じたり、今後力を入れたいと考えたりしている(図8)。

近年、各校が地域の実情に応じて、コンソーシアム(共同事業体)を構築したり、複数の高校が連携・協働して教育プログラムを開発・共有したりする事例が増えているが、そうした地域連携の充実は今後ますます重要になってくると考えられる。

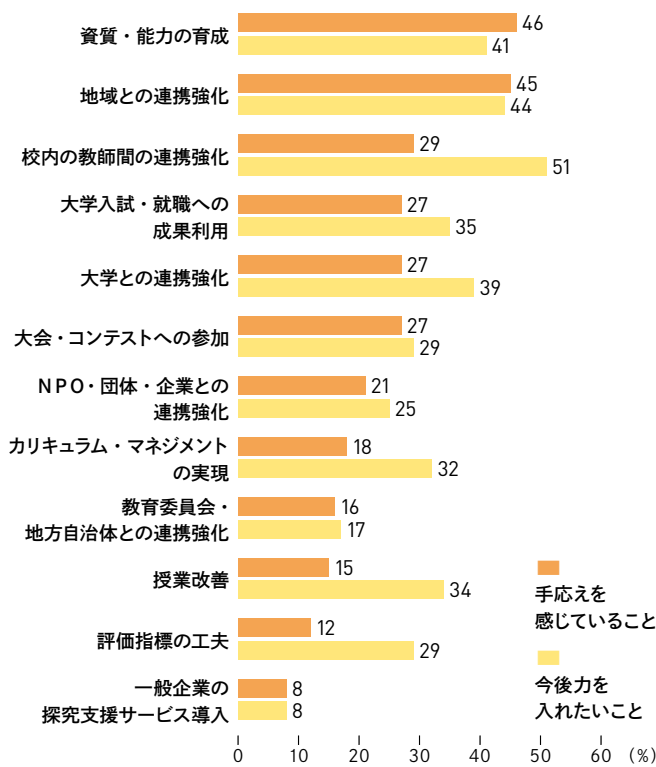
少子化や人口減少などで社会構造が変化する中、魅力的で質の高い学校教育を、地方や小規模の高校においても実現し続けるためには、地域の多様な人材が学校教育にかかわり、協働することが求められている。

図7 探究学習で設定する課題(1年生)



※数値は調査の有効回収数(722校)に対する割合。
※ベネッセコーポレーション教育情報センター 2024年度「新課程及び教育活動全般に関する調査」

図8 探究学習の効果として手応えを感じていること・今後力を入れたいこと(学校の変化)



※数値は調査の有効回収数(722校)に対する割合。
※ベネッセコーポレーション教育情報センター 2024年度「新課程及び教育活動全般に関する調査」

「学校の小規模化」「生徒の多様化」「探究学習等の学びの充実」という3つの課題に対応し、生徒の学びの機会を保障する取り組み・仕組みとして、「遠隔授業」「定時制」「通信制」「地域連携」について見ていく。

現状把握は P.8 / 事例は P.10 より

する取り組み・制度

徒の数が増加するなど、教師には、これまで以上に生徒一人ひとりのニーズに向き合うことが求められている。巻く環境が厳しくなる中、多様な生徒の学びの機会の保障につながっている取り組み・制度の現状を確認する。

定時制 勤労青年の学びの場から、学び直し・自立支援の場に

かつて定時制課程は、就業等のために全日制課程に進学できない生徒に高校教育の機会を提供するものとして制度化され、その役割を果たしてきた。近年は社会の変化に伴い、働きながら学ぶ生徒の数が減少する一方で、全日制課程を中途退学した生徒や、中学校までに不登校を経験した生徒など、様々な入学動機や学習歴を持つ生徒が多く入学するようになった。17年度の調査（*1）では、「小・中学校及び前籍校における不登校経験がある生徒」は、定時制課程において39.1%となっている。

従来、定時制課程の修業年限は原則「4年以上」であったが、履修上無理がなければ、全日制課程と同様、3年での卒業が認められる。近年、午前・午後・夜間の部の3部制を設ける昼夜間定時制高校が増加しており、午前の部に在籍する生徒が午後の部の一部を履修することなどにより、3年間で卒業が可能となっている。定時制課程は、全日制課程に比べ、学習時間や時期、方法などを自分のペースに合わせて選択できることから、学習上の困難を抱える生徒の学び直しや自立支援などの面でも期待されている（右図）。

*1 文部科学省平成29年度委託調査研究報告書「定時制・通信制高等学校における教育の質の確保のための調査研究」

図 定時制課程の特徴例

昼夜間2部制の定時制で、1部に在籍している生徒が、2部で開設される科目を履修できる場合、3年間で卒業が可能に。また、生徒の生活パターン等に合わせた科目の履修も可能。

単位制や総合学科を置く定時制では、生徒が自分の進路や興味・関心などに応じて履修科目を選べるよう、選択科目を充実させているところもある。

細かな校則を設けたり、制服を指定したりせず、一般社会で求められるルールやマナーを守ることを生徒に求める定時制も少なくない。

P.13で事例を紹介

地域連携 育てたい生徒像を地域とともに描き、教育活動を推進

「社会に開かれた教育課程」や探究学習は、学校や教師だけで実現するものではない。特に、配置できる教師の数が限られる小規模校では、コミュニティ・スクールの導入（全国の公立高校の37%が導入*1）や専門知を有するコーディネーターの配置など、地域社会との連携・協働が求められる。

高校が自治体、高等教育機関、産業界等との協働により、高校生と地域課題のマッチングを効果的に行うためのコンソーシアムを構築し、地域の問題の解決等に挑む探究的な学びを実現する取り組みを推進することで、地域振興の核としての高校の機能強化を図るケースもある。また、地域住民、保護者、企業、団体などから幅広い参画を得ながら、生徒に育みたい資質・能力を共有し、双方向の連携・協働に取り組む地域学校協働本部（全国の公立高校の19%をカバー*1）も注目されている（右図）。

ただ、そうした活動の実現にはコーディネーター機能の拡充が求められているが、「雇用にかかる経費負担」「コーディネーターの職務が不明確」「学校や行政におけるコーディネーターの役割に対する理解が不十分」といった課題（*2）もある。

*1 文部科学省 令和6年度コミュニティ・スクール及び地域学校協働活動実施状況調査（概要）

*2 文部科学省 2019年度「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」PDCAサイクル構築のための調査研究「高校と地域をつなぐ人材の在り方に関する研究会」報告書

図 高校と地域をつなぐ コーディネーター機能の位置づけ

高校における コーディネーター機能	地域における コーディネーター機能
<ul style="list-style-type: none">地域社会とかかわる教育課程の企画・運営・支援地域側との連絡調整・情報提供学校への地域資源の活用地域系部活動等の教育課程外の地域探究や活動の支援地域との連携・協働に係る研修の企画・実施 など	<ul style="list-style-type: none">地域資源（人・もの・こと・課題等）の掘り起し学校側との連絡調整・情報提供学校外での高校生を含む活動の企画・支援地域留学等新しい人の流れをつくる企画・調整（下宿等含む）卒業生とのつながり構築や活動支援 など
協働体制におけるコーディネーター機能	
<ul style="list-style-type: none">組織体制の構築・運営（ビジョン・計画づくり、事業・会議の運営等）外部資源獲得（ふるさと納税、寄附等）大学・民間企業等との連携・協働 など	

※文部科学省 2019年度「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」PDCAサイクル構築のための調査研究「高校と地域をつなぐ人材の在り方に関する研究会」報告書

P.19、P.22で事例を紹介

現状把握 学びの機会を保障

生徒の入学動機や学習歴、自分に合う学び方や希望進路などが多様化し、中学校までに不登校を経験した生
少子化により、高校をそれまでの規模で維持することが困難になる地域が全国的に発生するなど、学校を取り

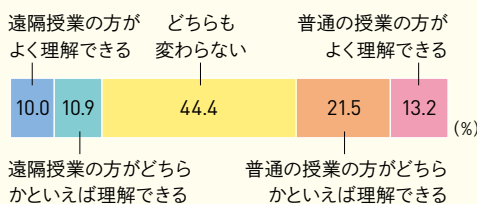
遠隔授業 生徒の履修科目や不登校生徒の学び方の選択肢を拡大

2015年4月から、全日制・定時制課程の高校において、対面により行う授業と同等の教育効果があると認められる場合、受信側に当該教科の免許状を持った教師がいなくても、同時双方向型の遠隔授業が可能になった。相当免許状を有する教師が少ない科目や、小規模校における幅広い選択科目について遠隔授業を行うことで生徒の学習機会の充実を図ることがねらいた。また、24年度からは、不登校の生徒が自宅などで同時双方向型の遠隔授業を受けた場合でも単位の修得が可能になった。現在、遠隔授業は、卒業までに修得を要する単位数(74単位)のほぼ半分にあたる36単位を上限(*1)として認められている。

文部科学省は、「COREハイスクール・ネットワーク構想」において、複数の小規模高校と都市部の高校が教育課程を共通化し、同時双方向型の遠隔授業を行う調査研究を23年度まで実施し、その成果や課題を分析した。それによると生徒は、遠隔授業に対して肯定的な評価をしており(右図)、教師も同様だった。一方で、画面を通じた学習活動が中心となるため、生徒の集中力が途切れやすいといった課題も明らかにしている(*2)。

*1 病室等において病気療養中の生徒等に対して遠隔授業を行う場合には、単位数上限の算定には含まない。
*2 令和5年度 文部科学省委託事業「COREハイスクール・ネットワーク構想における小規模高等学校ネットワークモデルに関する調査研究」最終報告書

図 遠隔授業について、通常の授業(対面授業)と比べてどう思うか



「COREハイスクール・ネットワーク構想」の同時双方向型の遠隔授業では、44.4%の生徒が遠隔授業と通常の授業について、「どちらも変わらない」と回答。対面授業と比較して一定の制約があるにもかかわらず、「遠隔授業の方がよく理解できる」「遠隔授業の方がどちらかといえば理解できる」とする回答も20%を超えた。

※令和5年度 文部科学省委託事業「COREハイスクール・ネットワーク構想における小規模高等学校ネットワークモデルに関する調査研究」最終報告書

P.10で事例を紹介

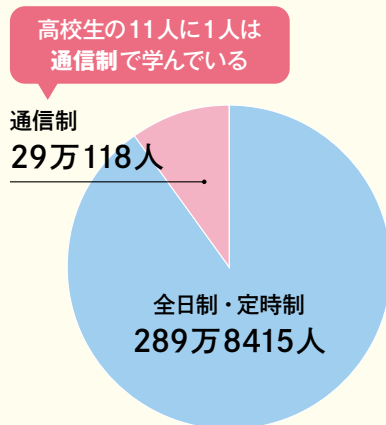
通信制 インターネットの利点を生かした教育で、生徒数、学校数ともに増加

通信制課程は、通信手段を主体とし、生徒が自宅などで個別に自学自習することとして、レポート(添削指導)・スクーリング(面接指導)・テスト(試験)などの方法により教育を実施し、ホームルーム活動や学校行事といった特別活動も行われている。定時制課程同様、不登校を経験した生徒や全日制の学びが合わなくなった生徒の学びの場として注目されている。2005年の高校生全体に占める通信制課程の生徒の割合は4.8%であったが、24年には9.1%を占めるまでになった(右図)。学校数も、175校(05年)から303校(24年)にまで増加(*1)。近年は、週1日以上通学して学ぶ「通学コース」で学ぶ生徒が増えている。

インターネット環境を活用して、小・中学校の学習内容の学び直しから国内・海外の大学受験対策、さらにはプログラミングや職業体験、起業家の指導・助言を受けられる問題解決型学習など、多様な学習コンテンツを用意し、従来の学びに飽き足らない生徒が主体的に通信制課程を選択するケースも増えているようだ。だが、一部の通信制高校には、レポートやスクーリング、テストの内容が高校教育としてふさわしいとは言えないものが見られ、質の確保・向上を一層図っていくことが求められている(*1)。

*1 文部科学省「通信制高等学校の現状と文部科学省の取組について」

図 通信制課程で学ぶ高校生



※文部科学省「学校基本調査」

P.16で事例を紹介

遠隔授業

遠隔授業の現状について
P.9で解説

小規模校が多様な教科・科目を設置できるよう、ICTを活用し、リアルタイムに授業を配信

北海道高等学校遠隔授業配信センター

北海道教育委員会は2021年4月、「北海道高等学校遠隔授業配信センター」(通称T-base。*1)を開設し、小規模校にリアルタイムでの授業の配信を始めた。受信校の生徒と信頼関係を築く機会には授業時のみが基本となる中、授業づくりに最大限、時間を割こうと、同センターは業務の精選・効率化を徹底。教師は新たな試みにも挑戦し、互いに学び合いながら、授業を日々進化させている。

どの地域に住む生徒にも、希望進路の実現を支援したい

面積が広大な北海道は、学校間の距離があるため、統廃合が難しく、高校が小規模化しやすい。実際、道立の全日制高校188校のうち、約3割が1学年1学級だ。小規模校は教職員数が少ないため、設置できる教科・科目が限られることから、大学進学を目指す生徒の中には、都市部の高校に進学せざるを得ない者もいた。そうした課題を受けて、北海道教育委員会は2021年4月、小規模校に授業を配信する「北海道高等学校遠隔授業配信センター」を開設した。佐藤書記次長はこう語る。「小規模校に進学した生徒も、自らの可能性を最大限に伸ばし、希望進路を

実現することができるよう、授業を配信しています。多様で質の高い授業を提供することは、都市部への生徒の流出を防ぎ、地域の発展に貢献する人材を育てる点でも重要だと考えています。」

同センターは高性能カメラやマイク、モニターなど、様々なICT機器を備え、教師はオンライン会議ツールを活用してリアルタイムで授業を配信している(写真1・2)。受信校の教室にも大型モニターやマイクなどが設置されており、生徒は画面越しに同センターの教師とやり取りをする。生徒は1人ずつ端末を持っているため、教材などの受送信は各自の端末で行う。例えば、教師が送信したデジタルプリントに、生徒が端末上で取り組んだ場合、生徒が端末のデジタルプリントに



大島恵子
進路支援グループ
おおしま・けいこ
同校に赴任して4年目。数学科。



小上泰弘
進路支援グループ
こじょう・やすひろ
同校に赴任して2年目。国語科。



山本龍
進路支援グループチーフ
やまもと・りりょう
同校に赴任して3年目。英語科。



佐藤豊記
次長
さとう・とよき
同校に赴任して4年目。地理歴史・公民科。



千葉康平
進路支援グループ
ちは・こうへい
同校に赴任して1年目。地理歴史・公民科。



飯嶋めぐみ
進路支援グループ
いじま・めぐみ
同校に赴任して2年目。理科(化学)。



加藤将司
進路支援グループ
かとう・しょうじ
同校に赴任して3年目。英語科。

センター概要
設立 2021(令和3)年
所在地 北海道札幌市(北海道有朋高校内)
教師数 25人(センター長1人、次長1人、国語科1人、地理歴史・公民科3人、数学科7人、理科3人、外国語科5人、芸術科3人、情報科1人)

*1 T-baseの由来は、Tele Teaching(遠隔授業を)、Tied Triangle(同センター、受信校、教育委員会の三者がしっかりと結びついて)、Tonnden base(屯田[同センターの所在地]から発信する拠点)である。

生徒の学びの機会をどう保障するか？

会う機会が限られるからこそ、生徒との関係づくりを重視

同センターで授業を担当する教師は23人で、受信校の生徒によりよい授業を届けようと、様々な工夫をしている。英語の授業では、集音マイクでは生

入力している画面を、教師はモニターで見ながら、適宜アドバースができる。配信教科・科目は受信校の希望に応じて設定され、24年度は保健体育と美術、家庭以外の8教科29科目で、週250時間に入った(図1)。国語、数学、英語は習熟度別授業の希望が多く、主に大学進学を目指す生徒向けの授業を担当している。1コマは50分間で、授業開始時刻は全受信校で統一し、午前は毎時50分、午後は毎時25分だ。受信校では、授業に教師または学習支援員が立ち会い、生徒を支援している。

なお、遠隔授業の単位認定の要件であることから、教師は担当の受信校を年2回訪れ、対面授業を行う。また、学習評価は受信校の内規に沿って行うため、同じ科目でも評価方法が学校によって異なる場合がある。定期考査は受信校の試験日程に合わせて実施し、単元テストは実施日を事前に生徒に伝え、授業時間内に行う。

徒個々の声が聞き取りにくいという問題があった。そこで、生徒がメタバースの空間に入り、各自の端末のマイクを使うようにしたところ、生徒一人ひとりの声をしっかりと聞き取ることができた。

化学の授業では、普通教室でも実施できる、色の変化を見取る実験を考案。実験で使う材料は、対面授業で受信校を訪れた時に担当教師に預け、遠隔授業で実験を行う際に生徒に渡してもらうようにしている。

「日本史探究」を担当する千葉康平先生は、受信校の所在地の歴史を踏まえた授業を行っている。

「受信校が沖縄に修学旅行に行ったことを踏まえて、受信校が所在する地域の戦争に関する歴史に触れ、住民として戦争の遺産とどう向き合えばよいかを考えてみよう」と問いかけました」

受信校の生徒は画面越しに教師を見ることが出来る点に留意して行動していると、数学科の大島恵子先生は語る。

「例えば、教科書を持つ手の位置をカメラの画角に入る高さ上げて、今何に取り組んでいるのか、次に何をやるのか、視覚的にも生徒に伝わるようにしています」

生徒との関係づくりも工夫している。国語科の小上泰弘先生は、同セン

図1 2024年度 遠隔授業の配信状況

配信教科・科目数 8教科29科目/国語(古典探究)、地理歴史(地理総合、地理探究、歴史総合、日本史探究、世界史探究)、公民(公共、倫理、政治・経済)、数学(数学I・II・III、数学A・B・C)、理科(科学と人間生活、物理基礎、物理、化学、生物基礎、生物)、芸術(音楽I、書道I)、外国語(英語コミュニケーションI・II・III、論理・表現I・II・III)、情報(情報I)

配信授業数 週250時間

教師1人あたりの授業数 週12時間(最大)、担当校6校(最大)

受信校数 31校(地域連携校29校、離島の協力校2校)

受講生徒数 861人

受信校の場所



同センターは札幌市に所在。※同センター資料を基に編集部で作成。



オープンスペース 6か所

写真1 遠隔授業の配信の様子。大きなモニターには受信校の生徒が、小さなモニターには受信校に配信している画面が映し出されている。背景のグリーンバックでクロマキー合成(*2)が可能だ。



個別ブース 7室

写真2 音が漏れないよう、防音パネルで囲んだ個別ブースは、教師がインターネットで資料を探して作成した。ブース内のホワイトボードを2面にしたり、教師が持つ教科書が画角に入るようカメラの位置を調整したりと、日々工夫している。



ブースの中

*2 映像の一部から特定の色の成分を分離し、そこに別の映像を合成する技術。

ターに赴任時に、授業以外に接点がない受信校の生徒との関係づくりについて、周りの教師に相談したところ、振り返りシートの活用を勧められた。そこで早速、授業に取り入れた。

「今年度は生徒に毎授業、振り返りを入力させていますが、私からのコメントがあるからか、生徒は毎回丁寧に入力してくれています。生徒との信頼関係の構築のために始めましたが、生徒のコメントは私の授業改善に役立っています。生徒にとっては自分の理解度を確認することができる機会になっていると思います。書く頻度が高いことで、文章力の向上にもつながっています」

生徒の学びのために受信校の教師との関係も大切にしていると、英語科の加藤将司先生は語る。

「例えば、授業の冒頭に行う英会話のペア活動の時に、受信校の生徒数が奇数だった場合は、授業に立ち会っている受信校の教師に『今日はAさんと組んでもらえますか』と、生徒と一緒に活動するようお願いしています。また、受信校の教師から生徒の様子を聞いて、授業中の声かけに生かしています」

そのように遠隔授業で関係性を築いた上で、対面授業で実際に受信校の生徒や教師に会い、生徒や学校の状況を把握して、授業づくりに生かしている。

トライ&エラーを推奨する文化が、授業をよりよくする

同センターの教師の授業改善を支えているのが、業務の精選・効率化と教師間の情報共有、挑戦し続ける風土だ。会議は危機管理にかかわる緊急時のみにしか行わず、朝礼や職員会議も実施していない。情報はすべてチャットに上げ、教師の所在を問わず情報を共有。また、共有できる情報はすべて開示し、職位によって情報格差が生じないようにしている。進路支援グループチーフの山本龍先生は、こう語る。

「実施する会議を絞り、資料はすべてデータで共有するなど、効率化を図った結果、前任校と比べて授業づくりにかけられる時間が大幅に増えました。遠隔授業はほぼ前例がないため、受信校の希望に応える授業をいかに実現するか、自分たちで答えを創っています」

誰もが新しいことに挑戦していると、同センターの開設時から在籍する大島先生は語る。

「何事も試し、駄目な点は改善する、その繰り返しです。授業も教師間でよく見合います。『ジグソー法を用いた授業をします』など、チャットに発信されたことが気になれば授業を見に行き、居合わせた教師と気づきを伝え合



写真3 授業の見学はいつでも可能。担当教科・科目にかかわらず、機材の使い方や教材の提示の仕方などを気軽に相談・質問することを通して、ノウハウを共有している。

い(写真3)、有益な情報はチャットで共有します。また、誰もが試行錯誤していることで、教師間で質問しやすい雰囲気があります」

授業中の機材トラブルはチャットで状況を伝え、手の空いている教師がかけて支援する。また、実現したいアイデアがあれば、アプリの開発企業やデジタル機材メーカーなどにもよく質問・相談している。教師が必要な機材を探し出し、教育委員会に予算交渉をするなど、よりよい授業の実現に向けて、様々な手を尽くしている。

受信校の生徒は学びたい教科・科目を履修できているからか、真剣に授業に臨んでいると、飯嶋めぐみ先生は言う。

「今年度、履修者が少人数の『化学』

図2 遠隔での進路支援

長期休業中の講習：ライブ配信・オンデマンド配信

全道に同時配信、大学入試に対応した発展的な内容。

2024年度春季	3日間	10講座	延べ578人参加
2024年度夏季	10日間	28講座	延べ758人参加
2024年度冬季	8日間	22講座	延べ532人参加

進路ガイダンス

生徒対象7回（入試情報、学習法、公務員セミナーなど）
教師対象8回（入試情報、小論文対策など）

模擬試験の講評

問題分析、解法の概要、今後の学習ポイント

※同センター資料を基に編集部で作成。

を担当しています。週4回ある授業を、生徒は休むことなく出席しています。毎回真剣に授業を受けている生徒を前に、私はどんな授業をすれば、その生徒の心に火をつけることができるのか、考えを巡らせ、模索しながら授業を進めています」

同センターは、受信校以外の生徒も無料で受講できる、長期休業中の講習や進路ガイダンスも実施している。遠隔授業に関心を持つ学校や生徒も増えているため、受講者数は拡大し続けている(図2)。

「受信校数は、25年度には32校に増える予定です。規模が拡大しても、各校の希望に応えられる体制を築くことが今後の課題です」(佐藤次長)

定時制

定時制の現状について
P.8で解説

生徒の入学動機、学習歴、学びの特性を理解し、安全・安心な学習の場をつくる

宮城県・仙台市立仙台大志高校

宮城県・仙台市立仙台大志高校は、昼夜2部制で単位制の定時制高校だ。同校の生徒の入学動機や学習歴、高校での学習の目的や希望する生活スタイルは多様であることから、同校は生徒一人ひとりのニーズに添えつつも、自ら考え、行動し、社会に貢献できる人材の育成に取り組んでいる。

地域貢献活動を通じて、生徒の自己肯定感を高める

仙台大志高校はI部（授業時間帯は朝から夕方まで）、II部（授業時間帯は昼休み後から夜間まで）を設置。学年の区別がない単位制を採用している。入学した生徒の中には、就業等の理由で全日制高校を選ばなかった生徒もいるが、近年は多くの定時制高校同様、全日制高校を中途退学した生徒や、中学校時代に不登校を経験した生徒が増えている。「生徒の入学動機や学習歴は多様だが、すべての生徒に自分の将来を実現する力を育むことが本校の使命」と山田善弘校長は語る。

宮城県・仙台市立仙台大志高校は、昼夜2部制で単位制の定時制高校だ。同校の生徒の入学動機や学習歴、高校での学習の目的や希望する生活スタイルは多様であることから、同校は生徒一人ひとりのニーズに添えつつも、自ら考え、行動し、社会に貢献できる人材の育成に取り組んでいる。

づくりを学ぶことを目的とした地域貢献活動だ。その1つが、自治会（生徒会）が企画・運営する「GTCカルチャ」という文化交流事業で、教師や自治会の生徒と、同校が所在する仙台市宮城野区の五輪地区町内会が協働し、紅花染めや水引による小物作り、災害対策講座、ヨガ講座などを、2015年度から実施している。24年度はドローンを使った親子教室を開催した（P.14写真1）。

人たちは生徒を応援してくれています。そのため、生徒はやりがいを持って活動に取り組んでいますし、自分にとっての社会貢献ができるかを考えることで、自己肯定感を高めることができているようです」（山田校長）

多様な入学動機や学習歴を持つ生徒に向き合う同校の教師には、生徒一人ひとりの個性や特性、ニーズを見取りながら授業を行うことが求められる。「ブランドデザインに『誰もが活躍できる学校』を掲げる本校の教師は、様々な配慮や工夫をしながら授業を行っています。私が授業を見学する中で

全員参加の研修で教師が学ぶ安全・安心な学習環境づくり

それらを特に感じるの、心情的な支援の面です。自己肯定感が高まるよう、小さな成長も見逃さずに褒め、間違った答えや言葉足らずの意見について



橋本正裕
教頭
はしもと・まさひろ
同校に赴任して2年目。



板橋俊文
教頭
いたばし・としふみ
同校に赴任して1年目。



山田善弘
校長
やまだ・よしひろ
同校に赴任して2年目。

も、『なぜ、そう思ったのか』と投げかけ、生徒が考える材料とすることで、そうしたつまづきを思考力やコミュニケーション能力を育む機会にしています。また、入学前に不登校を経験した生徒が少なくないため、『分かっているよね』『習ったよね』といった前提で授業をしないようにしている点にも配慮が感じられます」(山田校長)

ほかに、「聞く・書く・話す」などの複数の活動を並行して取り組むことが苦手な生徒に配慮する」「ノートを写すのが苦手な生徒のために、ICTやプリントを効果的に活用する」といった工夫が行われている。

授業改善を組織的に進めるため、特別支援教育などの専門家を招いた全教

師対象の校内研修を実施している。

「24年度は、公認心理師を講師に招き、ユニバーサルデザインの観点から、生徒が学習に集中しやすい掲示の仕方や座席配置、生徒への情報伝達の工夫などについて学びました。研修のポイントはプリントにまとめ、非常勤講師にも共有しました。開講科目数が多い本校では、学校が一体となって授業改善を進めることが重要です」(橋本正裕教頭)

山田校長は互見授業を強く推奨しており、教師間での授業公開は少なくとも年に一度は行うよう、教師に求めているという。

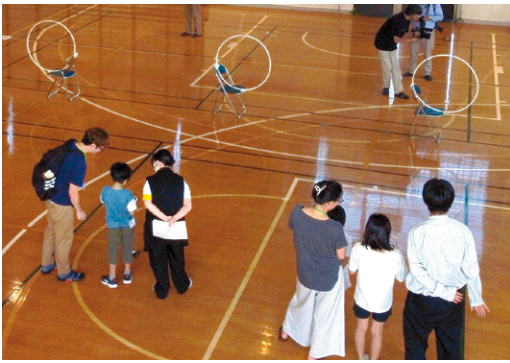


写真1 地域の小・中学生とその保護者を対象に、自治会が企画・運営した公開講座「親子ドローン教室」。



写真2 地域の清掃活動も自治会による地域貢献活動の1つ。地域住民に同活動の説明を行った後、約1時間、清掃を行った。

多様な背景を持つ生徒を 教師全員で理解する

一人ひとりの生徒を理解することを目的に、毎年4月に実施しているのが「生徒を知る会」だ。特に、特性上の課題を抱え、指導上、特別な配慮が必要な生徒に関する情報は、非常勤講師も含めて共有するようにしている。

「中学校からの申し送りや入学前相談会で保護者から寄せられた相談などを基に、『この生徒に声をかける際には、こんなことに気をつけてほしい』『授業でペアをつくる時には、こういう生徒と一緒にした方がよい』などと、具体的なかつ詳細な情報を共有しています。『高1ギャップ』を生じさせないための、重要な取り組みになっています」(橋本教頭)

「どの高校にも、それぞれの困り事を抱えながら登校している生徒はいるはず。社会全体で不登校の生徒が増加する中、一人ひとりが安心して学べる学校をつくるためには、本校のよ

うな生徒理解が今後一層必要になると思います」(板橋俊文教頭)

同校に赴任した教師の多くが、中学校で不登校だった生徒が学校復帰を果たす様子に驚くという。

「『社会のルールが学校のルール』で

学校概要

設立 2009(平成21)年
形態 定時制/普通科(単位制)/共学
生徒数 一部・二部約230人
2023年度卒業生進路実績 4年制大は、東北学院大、東北生活文化大、東北文化学園大に延べ3人が合格。短大・専修学校等進学22人。就職33人。

ある本校には、始業・終業チャームがありませんが、遅刻は厳禁ですし、9回欠席すると、単位を修得することができなくなります。そういった点では、全日制の高校以上に自己管理が求められます。それでも、不登校から学校復帰する生徒が多くいます」(板橋教頭)

山田校長は、「小さな成功体験を教師が認めるからこそ、生徒の中に学校での時間を大切にしようという気持ちが湧き、自己管理の意欲が生まれるのではないか」と考えている。

「誰もが活躍できる学校になるためには、すべての生徒が、自分が活躍できる場所を学校の中に見つけられることが欠かせません。安心して学校生活を送れるからこそ、夢や目標を持てるようになり、それが基本的な生活習慣の確立や自立・自律の気持ちにつながるのではないのでしょうか。入学直後は困り事を抱えていた生徒が、時間とともに落ち着いていく様子を見て、私は心からそう思っています」(山田校長)

在校生に聞く

定時制高校を選んだ理由、 得られた学びと成長

自治会に所属し、G Tカルチャーを始めとする地域貢献活動に取り組む5人の生徒に、高校選択と高校生活について聞いた。



左から、末永さん、吉川さん、田中さん、枝村さん、斎藤さん

- 1 仙台大志高校を志望した理由を教えてください。
- 2 仙台大志高校で学んだこと、成長できたことを教えてください。



I部3年生
吉川晴夏さん

1 中学3年生の1月まで進路が未決定だった私は、知り合いから仙台大志高校のことを教えてもらいました。細かい校則が存在せず、社会のルールが学校のルールであること、アルバイトを応援してくれることなどが、それまで全日制の高校しか知らなかった私にはとても魅力的な学校に思えました。

2 細かい校則がない分、自己管理が求められる高校生活を送ってきました。先生方も日々、自己管理の大切さを口にされています。どの授業を選択し、どんな高校生活にしたいのか、自分で考え、決める経験ができたことは、自分の将来にきっと生きるとしています。また、自治会長として地域貢献活動を企画・運営し、たくさんの学びを得ました。



I部2年生
田中優菜さん

1 中学2年生で不登校になり、勉強についていくことも、将来を考えることも難しくなりました。そんな時、中学校の先生から、「いろいろな事情を抱えながら学ぼうとする人を受け入れてくれる学校だよ」と、仙台大志高校を紹介してもらいました。時間割次第で午後から登校できるため、無理なく学校に通えそうだと思います。

2 定時制の高校生活に対して少し不安もありましたが、友だちもできて、とても充実しています。G Tカルチャーや地域の清掃活動などを通して地域の人と接する中で、コミュニケーション能力が高まったと思っています。中学校を卒業する頃は無気力な私でしたが、今は将来の夢も持てて、以前の前向きな自分に戻れた気がします。



I部2年生
末永菜広さん

1 中学生の頃の私は、学校も勉強も嫌いで、人とかわることも苦手でした。でも、この学校の卒業生から「面白い学校だよ」と聞いて、進学することにしました。時間割を自分で作ることができるという、大学のような雰囲気があるところや、アルバイトも大切な経験として先生方が応援してくれるところも気に入りました。

2 個性豊かで、中学校時代までにそれぞれいろいろな経験をしてきた人たちと一緒に学ぶことで、柔軟性が高まっていった気がします。G Tカルチャーで地域の人と接する中で、自分はずきあいは得意ではないけれど、決して人が嫌いなわけでもないし、楽しいことならどんな人とやってみたいということに気づきました。



I部2年生
枝村永遠さん

1 髪の毛の色を好きな色に染めることで、自分を思う存分表現してみたかったので、校則が厳しくない高校を探していたところ、「社会のルールが学校のルール」というこの学校を見つけました。自分の興味・関心を基に、自分で時間割が組むことができることも魅力的だと思いました。

2 仙台大志高校に入学して、同じ高校生であっても、それぞれ様々な経験をしてきて今があるのだと思いました。相手のことを少し知って、そして相手にも少し自分のことを伝えて、そうして時間をかけて、互いに理解し合いながら人間関係は築いていけることを学びました。高校卒業後の進路のことも考えて、髪の毛の色は黒に戻しました。



I部2年生
斎藤真麻さん

1 家庭の経済的な事情から、高校在学中にアルバイトをする必要がありました。そのため、アルバイトを応援してくれて、時間割を自分で作ることができるこの高校を選びました。定時制のことをよく知らなかったので、人間関係がうまくいか心配だったのですが、入学してみると、みんな接しやすい人ばかりでした。

2 仙台大志高校の先生方は、いつも親身に私のいろいろな相談に乗ってくれますし、尊敬できる先輩もできました。また、私は人とコミュニケーションを取ることが苦手なのですが、地域の清掃活動などを通じて地域の人たちとかわっていく中で、苦手意識も大分なくなってきたと思っています。

通信制

通信制の現状について
P.9で解説生徒が学び方を選んで学ぶ環境を整備し、
自分のペースで自立できるよう、生徒を支援
岡山県・私立岡山理科大学附属高校通信制課程

岡山県・私立岡山理科大学附属高校通信制課程は、通信制課程での単位認定の要件であるレポート提出とスクーリングなどのほかに、生徒が自分の興味・関心を見いだしたり、好きなことを掘り下げたりする教育活動を設け、毎日の登校を推奨している。生徒の多様な学びのニーズに対応するとともに、卒業後、生徒が自立した生活を送れるよう、学力の向上と精神の成長を支援している。

「自宅」と「学校」のどちらでも
学んでも単位修得が可能

岡山県・私立岡山理科大学附属高校は2000年4月、通信制課程を設置した。当時、全国的に増えていた不登校の生徒が、毎日登校しなくても高校教育を受けられる機会を提供するためだ。働きながら高校卒業の資格を得たいというニーズも一定数あったことから、通信制課程での単位認定の要件であるスクーリングを、社会人が出席しやすい日曜日に設定するなど、よりよい仕組みを模索。そして21年度、『好き』を究めるシン・ガッコーをキャッチフレーズに、生徒が「@Home型」と「@School型」のどちらかの学び方を自分で選べるようにした。

2つの学び方に共通するのは、高校卒業に必要な74単位の修得だ(図1)。必修科目以外は、生徒が自分で履修科目を選択。前・後期制である同校では、各期に最大15単位まで履修できる。単位認定の要件は、各科目が課すレポートの提出と、年2回の集中スクーリングへの出席だ。各期の初めに、その期に課す全レポートが配信され、生徒は自宅や学校などで取り組み、期日までに提出する。レポートを提出すると、授業とテストが行われる集中スクーリングへの出席資格が得られる。集中スクーリングの期間は毎日登校し、テストに向けた学習が行われる授業を受け、テストで合格点が取れば単位修得となる。テストの内容は基礎的なものだが、合格基準は厳しく設定している。

なお、生徒は1人1台の端末を持ち、レポートの受送信のほか、質問や相談、事務連絡などにも活用している。

2つの学び方の違いは、@Home型は卒業単位の修得のみが必須で、登校する必要はほとんどないのに対し、@School型は卒業単位の修得に加え、登校してレポート提出に向けた指導を受けたり、様々な活動に参加したりすることができる点にある。

生徒は自分の状況や希望に応じてどちらかの学び方を選ぶ。仕事や夢の実現力を入れるために@Home型を選び自宅ですぐ生徒、学校の活動に参加したいと@School型を選び、できるだけ登校しつつも、体調不良の時は自宅学習に切り替える生徒、半年間海外に留学し、その期は修得単位数

が0でも、残りの5期で卒業単位を修得する生徒など、学び方は多様だ。期ごとに学び方を変更することもできる。ただ、学び方に制約が少ない半面、自己管理が求められると、@School型担任の岡野文昭先生は語る。

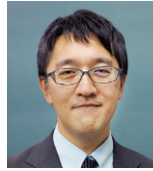
「通信制の生徒は卒業要件を十分理解し、自分の意思で科目を履修する必要があります。卒業することができるよう、自分で考えて選択し、行動することが求められる点で、自由でありながら、厳しいとも言えます」

そうした中で@School型を設置した理由を、土屋俊之教頭は次のように説明する。

「通信制に入学する生徒の多くは、中学校時代に不登校だったり、特別支援学級に通っていたりした生徒です。

生徒の学びの機会をどう保障するか？

毎朝登校し、大人数で授業を受けることが難しい生徒もいます。そうした生徒が自分のペースで登校し、周囲と人間関係を築きながら様々な活動に取り組み、進学や就職をした後に自立した生活を送れるよう、学びと経験を重ねていくのが@School型です」



教頭
土屋俊之
つちや・としゆき
同校に赴任して4年目。英語科。



教務課、@School型担任
岡野文昭
おかの・ふみあき
同校に赴任して28年目。国語科。情報科。ITロボティクスを担当。



@School型担任
松島明希子
まつしま・あきこ
同校に赴任して12年目。理科。たんQサイエンスを担当。

学校概要

設立 2000(平成12)年
形態 通信制/普通科/共学
生徒数 1学年約60人
2023年度卒業生進路実績 私立大は、開智国際大、京都芸術大、京都産業大、京都精華大、大阪工業大、大阪芸術大、大阪産業大、関西福祉大、岡山理科大、吉備国際大、倉敷芸術科学大、ノートルダム清心女子大などに延べ18人が合格。専門学校進学4人。就職4人。

徐々に学校に慣れていけるよう、系統別活動のみの参加も歓迎

@School型は、午前はレポート作成指導など、午後は「木曜スペシャル」や系統別活動などの時間割が組まれている(P.18図2)。

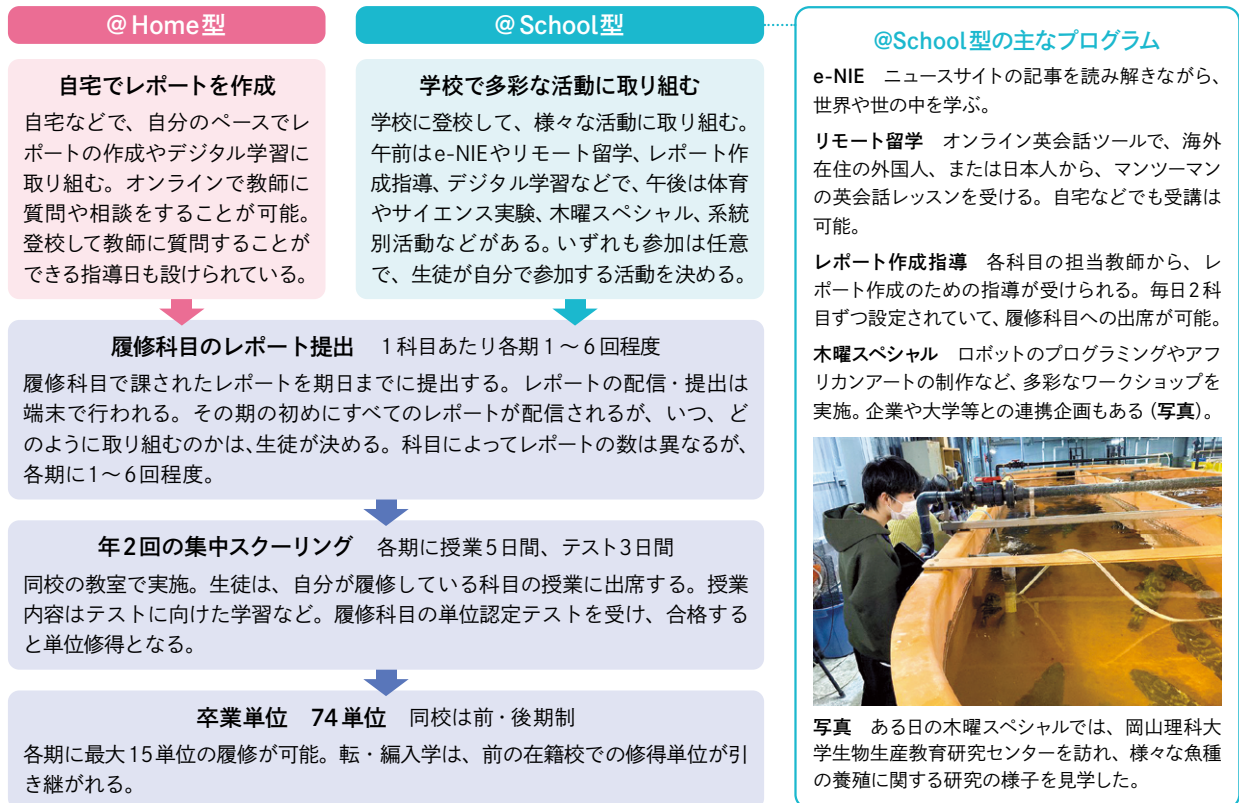
レポート作成指導は、各科目の担当教師がレポート提出に向けて指導する活動だ。毎日2科目ずつ設定されており、生徒は履修科目のレポート作成指導に出席する。@School型担任の松島明希子先生はこう語る。

「レポート作成指導に出席する生徒は10人程度で、生徒一人ひとりの学力や特性に応じた指導をしています。生徒の主体性を重視しているため、生徒が質問してきたら教師は答える形としていますが、自分から支援を求めるのが苦手な生徒には、教師から声をかけるようにしています」

木曜スペシャルでは、生徒が自分の興味・関心を見いだすきっかけとなるよう、多彩な活動を用意している(写真)。系統別活動は、「ITロボティクス」「eスポーツ」「たんQサイエンス」などの6つのプログラムがあり、生徒はその中から1つを選び、自分の好きなことを主体的に掘り下げていく。

@School型の活動は単位認定

図1 岡山理科大学附属高校通信制課程の仕組み



※学校資料を基に編集部で作成。

図2 「ジブン割」 生徒の記入例

登校・オンライン・在宅学習の中から、その日の学習方法を選択。登校の場合は登校時刻を記入

時間	5月16日(月)	5月17日(火)	5月18日(水)	5月19日(木)	5月22日(日)
08:00	S.H.R	S.H.R	S.H.R	S.H.R	
08:30	L.H.R	e-NIE	e-NIE	レポート 漢代文 e-NIE 日本語	
09:00	リモート留学 アッセンブリ	リモート留学 アッセンブリ	リモート留学 アッセンブリ	アッセンブリ	
09:30	AI学習 or レポート 作成	AI学習 or レポート 作成	AI学習 or レポート 作成	レポート 作成	
10:00	AI学習 or レポート 作成	AI学習 or レポート 作成	AI学習 or レポート 作成	レポート 作成	
10:30	ランチタイム	ランチタイム	ランチタイム	ランチタイム	
11:00	AL系国語	わくわく サイエンス or レポート	体育	木曜スペシャル * 習字対話 * 正解のない問題 * しかく高きうかへ	日曜 学習会
11:30	英語 4:25	音楽 読書 or 数学II	家庭科	清掃	系統別 活動
12:00	系統別活動	清掃	系統別活動	清掃	系統別 活動
12:30	日々の振り返り	レポートを 進めること ができました。	今日はいつも より集中でき ました。	視聴報告書を 少し進めるこ とができました。	保護者印 担任印 達成率 80%
13:00	日々の振り返り	演劇のストーリー なども決める ことができました。	今日はいつ も集中でき ました。	視聴報告書を 少し進めるこ とができました。	
13:30	日々の振り返り	日曜日の疲れが なかなかな り減りました。	今日はいつも より集中でき ました。	視聴報告書を 少し進めるこ とができました。	
14:00	日々の振り返り	日曜日の疲れが なかなかな り減りました。	今日はいつも より集中でき ました。	視聴報告書を 少し進めるこ とができました。	
14:30	日々の振り返り	日曜日の疲れが なかなかな り減りました。	今日はいつも より集中でき ました。	視聴報告書を 少し進めるこ とができました。	
15:00	日々の振り返り	日曜日の疲れが なかなかな り減りました。	今日はいつも より集中でき ました。	視聴報告書を 少し進めるこ とができました。	
15:30	日々の振り返り	日曜日の疲れが なかなかな り減りました。	今日はいつも より集中でき ました。	視聴報告書を 少し進めるこ とができました。	
16:00	日々の振り返り	日曜日の疲れが なかなかな り減りました。	今日はいつも より集中でき ました。	視聴報告書を 少し進めるこ とができました。	

出席予定の活動に丸をつける

日々の振り返りや1週間のまとめ、目標の達成率を記入

生徒は翌週の計画を自分で立て、「ジブン割」に記入して学校に提出する。「ジブン割」は保護者とも共有している。予定にない休みは、所在確認のため、学校に必ず連絡するよう、生徒に伝えている。『予定と異なる行動をするなら、その変更を何らかの方法で周りに伝えることは、社会では必須の行動だよ』と、生徒に説明しています」と、松島先生は語る。
※学校資料を基に編集部で作成。

には直接関係はないことから出席は任意だが、同校は登校を推奨している。「何時に登校しても、生徒には『よく来たね』と、私たちは笑顔で接しています。系統別活動のみの参加でも大歓迎です。短時間でも登校して周囲のつながりができれば、友人と一緒にらと、午後のほかの活動にも出席するようになりませう。教師と話す機会が増え、午前のレポート作成指導にも出

席するようになり、そうして徐々に学校に慣れていくことで、毎日登校できるようになっていきます」と松島先生。生徒の自立を支援する取り組みの1つが、「ジブン割」だ(図2)。次週のレポート作成指導の科目や木曜スペシャルの内容などを記載した時間割を配信。生徒はそれを見て、登校時刻や出席する活動を記入して学校に提出する。1週間の終わりに、今週は予定通り

クラスは全学年混合で、担任以外の教師にも相談できる

1クラスは約40人で、@Home型と@School型それぞれに2クラスずつ設けられたクラスは、全学年の生徒の混合としている。年齢や価値観、外見、経験など、多様な生徒が混ざることから、集団の中で誰かが浮くような状況は生じないと、岡野先生は言う。「生徒は互いを尊重し、どんな生徒も受け入れる、フラットな関係です。それが居心地のよさにつながり、登校を続けることができる要因にもなっています。クラス運営は基本的に生徒に任せ、生徒間で問題が起きてても、年長者の生徒がうまく収めてくれます。教師が介入するよりも、自分たちで解決した方が納得できることが多いようです」

また、生徒は学習面や生活の相談を担当以外の教師にも行うことができる。「生徒と教師の間にも相性はありますから、自分が話しやすいと思う教師

を生徒は選び、教師もそれを受け入れ、担任がとがめることもありません。そうしたことが風通しのよいクラス運営にもつながっています」と松島先生。子どもの就学に不安を抱えている保護者が少なくないことから、同校は普段から、学校での生徒の様子を保護者に伝えるようにしている。

「学校が連絡するのが問題が起きた時だけでは、保護者は学校からの連絡に対して身構えてしまいます。例えば、普段登校しない生徒が登校した際は、『今日は楽しく勉強していましたよ』と、生徒のよい様子を保護者に連絡して伝えるだけでも、保護者はとても安心するとともに、学校に信頼を寄せてくれるようになります」と岡野先生。教師が難しさを感じているのは、登校予定の生徒が登校してこない場合、その理由が体調不良なのか、怠慢や甘えなのかが分かりにくいことだ。「卒業後の生徒のウェルビーイングが重要であり、そのことを考えると、学力に加えて、精神面や体力面の強さも必要です。そのために登校を促していますが、つらい状況にある生徒に対して、教師は寛容であることも求められます。これからも生徒一人ひとりの状況を丁寧に見取り、成長を支えていきたいと思っています」と土屋教頭

地域連携

地域連携の現状について
P.8で解説

学校と地域、そして学校同士がつながり、 各校が教育活動を充実させる HAMADA教育魅力化コンソーシアム

島根県浜田市は、「浜田の未来びと」である高校生の地域協働活動をサポートし、未来につながる持続的な地域力の向上を実現するための共同事業体、「HAMADA教育魅力化コンソーシアム」を運営。探究学習や課題研究、地域ボランティアなどについて、学校・生徒と地域のニーズをマッチングさせ、教育活動の充実に寄与している。

市内5つの県立学校を軸に、 地域が協働体制を構築

島根県は、県立高校の魅力化を進めるにあたり、小・中学校、地域、市町村、大学、社会教育機関、企業などが参画し、魅力ある高校づくりに取り組む協働体制「高校魅力化コンソーシアム」を、2022年度までにすべての高校において構築した。過疎化・少子化が進む中、高校を核として持続可能な地域を創生しながら、社会に開かれた教育課程の実現により、地域の中で未来を生き抜く力を高校生に育むことを目指している。

HAMADA教育魅力化コンソーシアムでは、「高校生一人ひとりの魅力や個性を伸ばし、自『実現を支援する』」「魅力ある協働活動について、学校と地域双方からの情報を発信する」「地域・企業が高校生とつながり、地域課題に向き合う高校生を支援する」など、重点的な取り組み事項を掲げている。それらはコンソーシアムに属する5校の課題を踏まえて整理されたものだ。浜田商業高校の中澤雅美校長は、「それぞれに特色を持つ県立学校が、地域



島根県立浜田高校 主幹教諭
作野健一
さくの・けんいち
同校に赴任して4年目。国語科。



島根県立浜田商業高校 校長
中澤雅美
なかざわ・まさみ
同校に赴任して1年目。



島根県立浜田水産高校 教頭
佐々木健二
ささき・けんじ
同校に赴任して3年目。



島根県立浜田水産高校 海洋技術科 科長
田邊賢一
たなべ・けんいち
同校に赴任して2年目。



島根県立浜田水産高校 食品流通科 科長
真鍋翔
まなべ・しょう
同校に赴任して6年目。



浜田市教育委員会
魅力化コーディネーター
熊谷修山
くまがい・おさま
2022年度から現職。



浜田市教育委員会
魅力化コーディネーター
大地本由佳
おおじもと・ゆか
2019年度から現職。

図1 HAMADA 教育魅力化コンソーシアムが支援する活動例

■ 浜田高校「ちょこっ・トーク」



高校生とほぼ同数の地域住民が1対1で向かい合い、指定されたテーマについて1分ずつ考えを述べる。次々に相手を変えて、たくさんの人と出会う仕組み。

■ 浜田商業高校「浜商デパート」



高校魅力化の取り組みの一環として実施する大規模販売実習では、地元企業との連携、地域住民への広報で、魅力化コーディネーターと連携した。

■ 浜田水産高校「出前授業」



小・中学生に、浜田市の水産資源や食文化について関心を持ってもらうために、同校の生徒が講師になって漁業の現状などをテーマにした出前授業を行っている。

■ 探究活動Y.A.C. (ヤック)



生徒たちが学校を超えて協力し、地域活性化イベントを企画・実施する、HAMADA 教育魅力化コンソーシアム主催の地域系部活動。

と協働しながら地域の魅力を生徒に伝え、浜田市を愛する人材に育てることは、若年層の県外流出が進む地域の課題であり、学校の課題だ」と説明する。「子どもの数が少なくなる中、仮に進学や就職などで浜田市を離れても、何らかの形で浜田市にかかわる『関係人口』を増やすことが、今後ますます求められる。それは、この地域の未来の担い手の育成だけでなく、浜田市

の生徒たちの学びを豊かにすることにもつながります」

地域とつながることで、教育活動が豊かになる

HAMADA 教育魅力化コンソーシアムには、浜田市教育委員会の職員2人が魅力化コーディネーターとして配置されている。魅力化コーディネーター

は、生徒が探究学習において地域や地元企業と連携するといった、学校から地域に対する要望、あるいは生徒に地域行事などへのボランティアに参加してほしいといった、地域から学校に対する要望など、地域と学校がつながる際の窓口を一括して担っている。

各校は魅力化コーディネーターと連携して、自校の教育活動の質的向上を図っている。浜田高校では、1年生が地域住民と自分自身や地域の課題について語り合う「ちょこっ・トーク」を実施している(図1)が、同活動には1年生の人数とほぼ同数の約160人の住民が参加した。それだけの数の住民の参加が実現したのは、高校を活動拠点として学校と地域をつなぐ魅力化コーディネーターが広く地域に声をかけてくれたからだ。浜田高校の作野健一先生は語る。

「高校生にとって、家族や教師以外の知らない大人と話をする機会は、決して多くはありません。多様な年齢、職業の大人と語り合えたことは、自分自身や地域に対する理解につながったはず」

魅力化コーディネーターの熊谷修山さんも、「高校生にとって、地域に飛び出していく準備ができた」と手応えを語る。

島根県立浜田高校 学校概要

設立 1893(明治26)年
形態 全日制・定時制・通信制/普通科、理数科/共学
生徒数(全日制) 1学年約200人

2023年度卒業生進路実績(全日制) 国公立大は、京都大、広島大、九州大などに88人が合格。私立大は、早稲田大、同志社大、立命館大、関西大、関西学院大などに延べ140人が合格。

島根県立浜田商業高校 学校概要

設立 1965(昭和40)年
形態 全日制/商業科、情報処理科/共学
生徒数 1学年約80人

2023年度卒業生進路実績 4年制大は、島根県立大、広島経済大、広島工業大、福岡大に延べ4人が合格。短大・専門学校進学27人。就職28人。

島根県立浜田水産高校 学校概要

設立 1948(昭和23)年
形態 全日制/海洋技術科、食品流通科/共学
生徒数 1学年約80人

2023年度卒業生進路実績 短大・専門学校進学13人。就職25人。

「これほどいろいろな年齢、職業の大人と話したのは初めてです」と興奮気味に話す生徒を見て、生徒の目が地域に対して開かれたことを感じました。今後の地域をテーマとした探究学習にもよい影響をもたらすはず」

浜田水産高校も、「GAIN(グイン)トーク」と名づけた、1年生と住民との語り合いの場を、魅力化コーディネーターと連携して開催している。

生徒の学びの機会をどう保障するか？

図2 地域協働活動マッチングシート



● マッチングシートでイベントのボランティアを募集した団体から、参加した高校生に届いたお礼のコメント
「接客マニュアルもなく、想像以上の来場者に大人も混乱する中、高校生の皆さんがいなかったら、イベントは成功していませんでした。感謝しています。当イベントが浜田市の代表的なイベントとなるよう、努力していきます。大人になった時は、ぜひ実行委員の一員として、当イベントを引き継いでほしいと思っています」

「生徒が出会った大人は、探究学習や課題研究における身近な伴走役の候補の1人になります。生徒と地域の大人の関係性が持続しやすいのは、小さな町のメリットです」

「高校生が探究学習に伴走するにあたって、地域の人たちにも、探究学習について理解してもらうことが必要です。そこで、『教育魅力化勉強会』を定期的に開催し、探究学習を軸にした高校と地域の連携の意義などについて学び、高校生と一緒に取り組みたいことを話し合っています」(大地本さん)

そうした学校を超えた協働を経て、生徒たちは様々な挑戦を始めている。例えば、浜田商業高校の郷土芸能部が舞う「石見神楽」の口上を浜田高校の生徒が英訳して、上演中に音声で流す

とともに、浜田水産高校の生徒が「アッコウの唐揚げ」を観客に振る舞うというコラボレーションが実現した。

高校生の参加・参画を希望する地元企業や団体が、生徒に活動内容を伝える「地域協働活動マッチングシート」(図2)の利用も活発だ。これまでは教頭などの管理職が窓口となり、地域からの依頼文書などを整理・管理していたが、現在は魅力化コーディネーターが依頼内容を精査したマッチングシートを、オンライン上で生徒が自由に閲覧できるようにしている。そうした仕組みをつくったことで、学校側の業務負担が激減したと、各校の教師は異口同音に言う。また、生徒が直接、魅力化コーディネーターに対して、「こんな活動をしたい」と、企業・団体への仲介を求めるケースも増えている。

「学校と地域が『こういう生徒を育てたい』『こういう町をつくりたい』といった思いを共有することによって初めて、大人たちが市と県という違いを超えて、高校生の育成にかかわるようになる土壌が生まれるのだと思います。人口が減少し、生徒の数も減っていく時代だからこそ、学校と地域が互いの強みを生かしながら、未来の人材を育てていくことが必要だと思っています」(大地本さん)

「参加した住民の方から、『高校生が自分の言葉で伝えてくれた水産高校の魅力を知り、この学校はこれからは地域に必要なだと確信した』といった感想をいただきました」(浜田水産高校・佐々木健一教頭)

浜田市では、子どもたちに、水産資源や食文化、産業について、もっと関心を持ってほしい」という漁業関係者の思いから、市内の小・中学校の給食に「ノドグロ」を毎年提供しており、浜田水産高校の生徒は、4000尾を超える数のノドグロの下処理を担っている。地域と、深い学びを実現したいという学校の思いが重なった取り組みの1つだ。

「ノドグロを処理して給食センター

に納めるまで、生徒はいろいろな職種の人と協働します。水産資源が食品として市場に流通するまでのプロセスを、地域の中で学ぶことができている」(浜田水産高校・真鍋翔先生)

「さらに本校では、小・中学校に outgoing、高校生が講師になって漁業の現状などをテーマにした出前授業を行っています(図1)。ノドグロ給食を始め、高校で得た知識や技術を地域の大人や子どもに披露する場合は、生徒にとつて自己肯定感を高める機会となつています」(浜田水産高校・田邊賢一先生)

魅力化コーディネーターの大地本佳さんは、「人口が少ない町だからこそ、人と人の出会いは大きな可能性を持っている」と語る。

高校生の学びを支えるための勉強会を地域で開催

HAMADA教育魅力化コンソーシアムが主催する探究活動「MACT(ヤック)」(図1)は、コンソーシアム内の生徒が任意で参加する地域系部活動だ。生徒は、地域住民から町の課題を聞くなど、フィールドワークを行い、地域の課題の解決プランを考えながら、地域と自分の未来を考える。

「探究学習に必要で、定期的な開催し、探究学習を軸にした高校と地域の連携の意義などについて学び、高校生と一緒に取り組みたいことを話し合っています」(大地本さん)

そうした学校を超えた協働を経て、生徒たちは様々な挑戦を始めている。例えば、浜田商業高校の郷土芸能部が舞う「石見神楽」の口上を浜田高校の生徒が英訳して、上演中に音声で流す

地域連携

地域連携の現状について
P.8で解説地域の教育資源を生かした学校魅力化を
3町と県立高校が協働して推進
宮崎県立高千穂高校

宮崎県立高千穂高校は、同校が所在する宮崎県西臼杵郡にしうすきを構成する3町（高千穂町、日之影町、五ヶ瀬町）と連携し、2021年に「高千穂高校魅力向上推進委員会」を発足。以来、地域と協働して、生徒の学力の向上と、探究学習や地域でのボランティア活動を通じたキャリア教育の充実に取り組んでいる。

学力の向上と探究学習の充実、
2つの視点で魅力化を図る

宮崎県立高千穂高校は、宮崎県西臼杵郡に唯一ある県立高校だ。学校が所在する高千穂町は、全国有数の観光地として知られ、15年には、『高千穂郷・椎葉山地域の山間地農林業複合システム』が、国際連合食糧農業機関から世界農業遺産に認定されるなど、地域には教育資源があふれている。

しかし近年、西臼杵郡は宮崎県内で人口の減少率が最も高い地域となっており、同校の生徒数も年々減少。1993年度は入学者数が329人、全校生徒数が1008人だったが、21年度には入学者数は100人、全校生徒数は300人を下回った。同校は普

通科に加えて、農業、商業に関する学科を擁し、生徒の多様な進路希望に対応する体制がありながら、郡内の中学生の進学率は半分程度にとどまった。

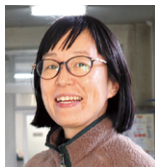
そうした状況に危機感を覚えた同校の前校長が、学校の所在地である高千穂町、そして日之影町、五ヶ瀬町に対して、地域住民に選ばれる学校になるために、地域資源を生かした学びの充実による学校の魅力化の必要性を訴えた。その後、3町の教育関係者と議論を重ね、各町の町長、教育長、議長、西臼杵郡内の中学校校長、高千穂高校のPTA会長や同窓会、社会教育関係者らとともに、高千穂高校の魅力化を通じて地域の活性化を図ることを目的とし、21年2月、高千穂町、日之影町、五ヶ瀬町が一体となって県立高校の支

援を行う「高千穂高校魅力向上推進委員会」が発足。3町の各役場内には、高千穂高校魅力向上推進委員会の担当窓口が設置され、高千穂高校と連携して具体的な支援策の検討を開始した。

現在、高千穂高校魅力向上推進委員会の事業は、「学力向上プロジェクト」と「地域協創プロジェクト」の2本柱に整理されている（図1）。学力向上プロジェクトでは、延岡市の民間の塾の講座をオンラインで受講する際の費用の支援や、大学・短大の公開講座に参加する際の交通費の補助など、山間部の高校生が学習面や進路選択の面で自分是不利だと感じることがなくなることを目指した施策を実施している。また、地域協創プロジェクトでは、地域住民によるキャリア講演や、生徒が



高千穂町地域おこし協力隊
高千穂高校
魅力向上コーディネーター
工藤天裕
くどう・たかひろ
2022年度から現職。



進路指導主事
河内弓枝
かわち・ゆみえ
同校に赴任して2年目。国語科。



校長
長友美紀
ながとも・みき
同校に赴任して2年目。

地域で取り組む探究学習・ボランティア活動の支援を実施している。

長友美紀校長は、「高千穂町が配置した魅力向上コーディネーターと協働

生徒の学びの機会をどう保障するか？

図1 高千穂高校魅力向上推進委員会の主な事業

学力向上プロジェクト	地域協創プロジェクト
<p>① 民間塾と連携した学力向上支援 大学進学を目指す生徒が、民間の塾の講座をオンラインで受講する際の費用を支援。</p> <p>② 大学公開講座受講支援 大学や短大などが実施している公開講座に参加する際の交通費を補助。</p> <p>③ 進路実現支援 面接指導、小論文対策、模擬試験監督などにかかる指導料を補助。</p> <p>④ 国際交流支援 外国人講師との交流を支援。</p>	<p>① キャリア教育 西臼杵郡内で働く地域住民によるキャリア講演の実施。</p> <p>② 地域連携活動支援 西臼杵郡内におけるボランティア活動や地域研修の支援。</p> <p>③ T-LABO 運用支援 地方創生の拠点としての多目的スペース (T-LABO) の運用の支援。</p>

しながら、探究学習を軸とした学校の魅力化を、生徒の姿を通して地域に伝えようと、一人ひとりの教師が努力している」と、学校の様子を説明する。

「これまで本校には、教師が学校の魅力を広報する部署が置かれていたが、魅力向上推進委員会が校外に設置されたことを受けて、広報活動は管理職とコーディネーターが中心となつて行い、教師には探究学習や教科学習の支援といった、一人ひとりの生徒に

寄り添うことに注力してもらおうようにしました。特に、探究学習において生徒を地域に送り出し、地域の人たちに生き生きとした生徒の姿を見てもらうことが、何よりの広報活動ではないかという考えに至りました」

地域と学校の違いを認め合い、つないでいく

高千穂高校に常駐する魅力向上コーディネーターの工藤天裕さんは、地域の教育資源を活用した「総合的な探究の時間」などの活動が、生徒にとって単なる「経験」で終わらず「学び」になるためには、地域と学校のコミュニケーションが重要だと語る。

「学校としては、生徒を単なる労働力として地域に送り出さたくはありません。決められた作業をこなす活動よりも、活動を通して生徒が得られるものをより大きなものとするために、生

学校概要

設立 1917 (大正6) 年
形態 全日制/普通科、情報ソリューション科、生産流通科/共学
生徒数 1学年約90人
2023年度卒業生進路実績 国公立大は、宮崎大、鹿児島大などに4人が合格。私立大は、専修大、津田塾大、立教大などに延べ20人が合格。短大・専門学校進学36人。就職25人。



写真1 高校の農場で栽培した釜炒り茶のペットボトルを観光鉄道の客に販売。用意した120本が完売した。

徒が自分で考えて、行動することができ余地をつくってもらおうよ、企業や団体と話し合うことも重要です」

高千穂町で観光鉄道を運営する企業から、同校の生徒に観光ガイドを担当してもらいたいという依頼があった。その活動を継続する中で、工藤さんは企業の担当者を学校に招き、生徒と話をする場を設けるなどした。

「対面して話をする中で生徒たちは、自分たちの学校で生産しているお茶を販売することで、地域と学校の魅力をアピールできるのではないかと、企業の担当者に提案しました。その企業は、生徒からのアイデアを歓迎し、当初は予定していなかったコラボレーション



写真2 山間部であっても外国人観光客が多い地域であるため、生徒たちは英語も交えたPOP広告を制作している。

が実現しました(写真1・2) (工藤さん)

地域と学校の慣習の違いが、「コミュニケーション」の障壁となることもある。例えば、地域からの伝統行事への参加依頼の際、募集依頼の書類が作成されていなかったり、学校が知りたい項目が不明だったりすることもある(P.24図2)。そのような場合は、コーディネーターが地域住民から依頼内容の聞き取りや資料の確認を行い、学校向けの実施要項の作成についての助言を行ったり、時には工藤さんが住民に代わって要項を作成したりすることもある(P.24図2)。そうしたコーディネーターの役割の重要性を認めつつ、

図2 地域と学校をつなぐコーディネーター

高千穂高校には、高校生との協働を希望する地域の企業や団体から多くの依頼が来るが、地域の伝統行事などの中には、住民同士が口頭で連絡を済ませたり、高校などに提出すべき文書がなかったりすることも少なくなかった。そこでコーディネーターの工藤さんは、地域からの要望を聞いたり、チラシなどの資料を見たりした上で、企業や団体に「このような情報を盛り込んだ依頼書があると、高校でも生徒に案内しやすい」と助言している。

●地域から提出されたチラシの例



●コーディネーターが企業・団体に助言した、依頼書に盛り込むとよい項目

- ・生徒を拘束する日時（集合から解散まで）
- ・活動場所、集合場所
- ・募集する人数、生徒に求める条件
- ・生徒が準備するもの（昼食など）
- ・担当者の名前、連絡先



●コーディネーターの助言を基に作成された依頼書（一部）

も参加していただき、例大祭と一緒に盛り上げたいと考えておりますので、御多忙な折に恐縮ではありますが、本会の趣旨を御理解いただき、多くの生徒の参加に御協力いただけますようお願いいたします。
なお、当日の车型等は下記のとおりでございます。ご不明な点などございましたら、下記連絡先まで遠慮なく御連絡ください。

- 記
- 1 日時 令和6年10月14日(月)
例大祭は午後1時から午後4時まで
 - 2 集合場所 高千穂町三田井809-1
(高千穂町観光協会事務所の奥手に会事務所があります)
午前10時までに集合をお願いします。
 - 3 その他 法被と昼食は本会で準備します。
集合場所にて着替えますので軽装でお越しください。
予め参加人数等を把握したいことから、恐れ入りますが別紙申込書を10月9日(水)までに作成いただきご連絡願います。

連絡先
電話

長友校長は、「私たち教師が、学校のあたり前を地域に求め過ぎないことも大切な」と考えている。
「教師が、『学校にはこういう文書が必要ですよ』『こういうスケジュール感で進めてください』と、地域に強く要求してしまつと、地域との連携は停滞するでしょう。生徒の安全を確保した上で、地域の方々に信頼し、可能な限り生徒を地域に送り出すことで、学校の扉は大きく地域に開かれるのだと思います。私たち教師が注力すべきは、地域との折衝以上に、地域での活動が生徒にとってどんな学びの機会として期待されるのか、実際にどんな学びを

得たのかを、生徒一人ひとりと対話を通して、明らかにすることです。コーディネーターが人と人をつなぐ存在であるならば、私たち教師は、生徒の経験と学びをつなぐ存在であり、その役割を果たすことにより一層注力していきたいと思っています」(長友校長)

異なる視点での支援を
間近に見て、教師も学ぶ

高千穂高校魅力向上推進委員会の事業がスタートして24年度で3年目を迎えてくるのは今後のことだが、既に西日

杵郡内の中学校から同校への進学率も着実に上昇しているという。
進路指導主事の河内弓枝先生は、大学入試や就職試験の面接において、地域での探究学習の成果や、地域の行事への参加を通して得た学びをアピールし、希望進路を実現する生徒が増えていると説明する。

「地域における活動の成果をさらに生徒の希望進路の実現につなげていくためには、私たち教師が、探究学習における生徒の支援のあり方をもっと追究していくことが必要です。地域と学校の両方に軸足を置き、生徒にとっての最適解を模索するコーディネーター

の生徒へのかかり方は、生徒を答えに導くことを得意としてきた私たち教師とは明らかに異なります。コーディネーターと生徒が探究学習について語り合っているところに若い教師が同席して、伴走のあり方を学ぶ様子がよく見られます」
高千穂高校の卒業生である河内先生は、生徒数が激減した母校への赴任に、当初は不安を感じていたという。
「学校から活気がなくなつてしまつたのではないかと心配でしたが、赴任してみると、それは杞憂だったことが分かりました。地域の教育資源を生かすことで、都市部の学校に負けないくらいの活気があると思っています」
同校では、地域住民が自由に利用できる多目的スペースを校内に設置し、学校と地域との接点を増やしている。
長友校長は、「一人の数が少なく、規模が小さくても、生徒、教師、地域住民が結びつければ、元気の学校、元気の地域になる」と語る。

「3町の住民の方々から、『最近、高校生が町で活動している様子をよく目にするようになってうれしい』といった言葉をかけてもらうようになりました。地域の中で学校の存在感が高まっていることをひしひしと感じています」(長友校長)

社会のシステムの一環として、 学校が社会とつながり、 多様な生徒の学びを保障する

ここまで、生徒の学びの機会を保障するために様々な工夫を重ねている5つの事例を紹介してきた。

それらの実践を通じて見える、日本の高校教育の未来はどのようなものなのか。その未来に向けて、全国の学校は

どんな視点や考え方を、取り組みを取り入れることができるのか。高校教師として地域連携などを推進し、定時制課程の

教頭なども務めた福井大学連合教職大学院の中森一郎教授と、VIEWnext編集部統括責任者の柏木崇が語り合った。

外部と協働して、 学びの選択肢を増やす

柏木 中森先生は県立高校や教育委員会に勤務され、本特集の事例等で示した、少子化地域の学校経営や多様な生徒への対応、地域と協働した学びなどに取り組まれてきました。5つの事例をどのようにご覧になりましたか。

中森 5つの事例にはいずれも、全国の学校が今後の自校のあり方を考える上での様々なヒントがあったと思います。まず注目したのは、多様な学びの提供です。宮城県・仙台市立仙台大志高校（P.13～15）や岡山県・私立岡山理科大学附属高校通信制課程（P.16

～18）が導入している単位制は、学年の区分がなく、生徒が自分で履修科目を選ぶため、自分のペースで学ぶことができます。必修科目以外の科目を生徒が自分の興味・関心を基に選べるようにすることは、今後の教育課程のあり方の1つとして、もっと多くの学校で検討されてもよいことだと思います。

柏木 仙台大志高校の生徒は、「勉強は嫌いだけれど、自分で選んだ授業だから頑張れる」と話していました。

中森 学びが自己選択・自己決定できる機会を広げることが、生徒の学習意欲を高めめます。

柏木 本誌10月号の特集で取り上げた

「自己調整学習」も、まさに生徒が自己選択・自己決定して進める学びでしたが、それに取り組んだ生徒は、主体性や学習意欲を高めていました。

中森 ただ、自校内で多様な科目を設定することが難しい学校があるのも実情です。そこで、他校や大学等の授業の履修を卒業単位に認定したり、他校と遠隔授業を行ったりするといったことが考えられます。少子化が進む中、北海道高等学校遠隔授業配信センター（P.10～12）のように、教育委員会が遠隔授業を行うケースは今後増えていくことでしょう。

柏木 すべての科目を自校内で設定しようとするのではなく、外部と協働す

福井大学
連合教職大学院 教授、
独立行政法人
教職員支援機構 フェロー

中森一郎

なかもり・いちろう 福井県の公立高校に国語科教諭として勤務後、福井県教育庁課長（学力向上）、福井県立若狭高校校長、福井県教育庁学校教育監等を歴任。若狭東高校勤務時は、若狭地区の県立高校再編整備にも携わった。現在、独立行政法人教職員支援機構のフェロー（学び合う教師コミュニティの形成支援）も務める。

VIEWnext 編集部
統括責任者
柏木 崇

ることが重要ということですね。

中森 一方で、自校の生徒に合う教育活動は積極的に行うべきで、その一つが、各校の判断で実施が可能な「学校設定科目」の設定です。私は定時制課程の教頭の時に、生徒の社会性を高めようと、対人関係能力などのソーシャルスキルについて学ぶ「トータルライフ」を学校設定科目として設定しました。

柏木 岡山理科大学附属高校通信制課程は、単位認定に必須のスクーリングなどとは別に、多様な活動を用意した「@schooler型」を設け、生徒が生活習慣を身につけられたり、社会との接点を持つようになりたりすることで、生徒の自立を支援していました。

中森 それはまさに学校らしい、教育的で、素晴らしい取り組みだと思います。

柏木 ただ、活動は任意参加のため、生徒が登校してこない時の理由が、体調不良なのか、怠慢なのか分かりにくく、生徒にどう声をかければよいのかが悩みだと、同校の先生は言われていました。

中森 活動への参加を生徒の主体性に委ねている点は、教育的配慮として重要です。学校が大事にしている指標、例えば、スクール・ポリシーを行動規範として生徒と共有し、それを声かけの規準とすることが考えられます。

生徒主体の授業改善に必要な視点とは？

柏木 多様化する生徒への対応においては、仙台大志高校が取り組む、ユニバーサルデザイン（以下、UD）の視点での授業設計の重要性を感じました。同校はそのノウハウを資料の形でまとめ、異動してきた教師でも自校の生徒に合った授業をスムーズに行えるようにしていました。

中森 どのような生徒も安心して学びに集中できる授業設計は、すべての学校が配慮したい点の一つです。本学でも、UDの視点での授業設計が推奨されています。ただ、特定の生徒への配慮といった視点だけでなく、学校全体に広がりにくい場合もあるかもしれません。授業改善の一環だと、自校の教師に捉えてもらうようにするとよいでしょう。

柏木 生徒目線での授業改善について、ほかに留意すべき点がありますか。
中森 生徒に授業アンケートを行う学校は多いと思いますが、生徒に直接、授業のよい点や改善してほしい点を聞くことが大切です。生徒が主語の学校づくりをするのであれば、授業改善や学校行事の運営などに生徒が参画できるようにすべきではないでしょうか。

また、小・中学校では今、自己調整

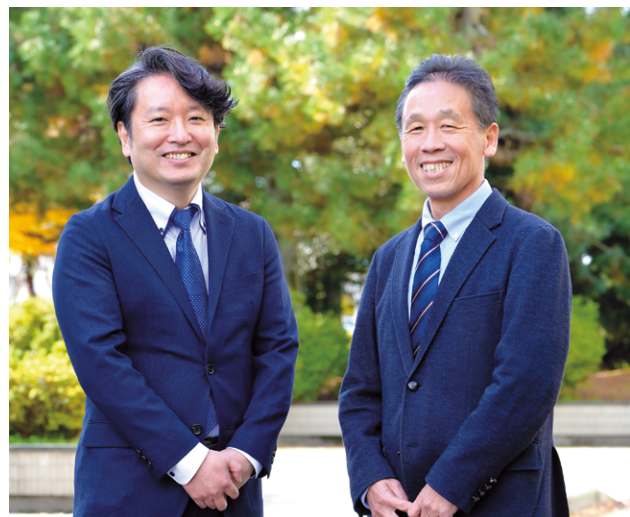
学習など、児童・生徒が主体的に学びに取り組む授業づくりが盛んに進められています。数年後には、授業で主体的に学んできた生徒が高校に入学してきます。高校の先生方には小・中学校の授業を見学し、学びの変化を体感した上で、これからの授業について考えを巡らせてほしいと思います。

市町村との連携が高校の活性化の鍵

柏木 地域連携によって生徒の学びの機会が広がっている事例を紹介しましたが、宮崎県立高千穂高校（P. 22）は、前校長が自ら町役場に地域連携を提案し、実現させていました。

中森 多くの市町村は地域の存続が重要な課題で、生徒が地域で活動し、地域を盛り上げてくれることは大歓迎です。生徒が活躍する姿を地域住民に見てもらえれば、学校のPRにもなります。校長の裁量で進められる市町村との連携は、高校の活性化につながります。

高校との連携に価値を見いだしている企業も多いと思います。例えば、若手社員が生徒の探究学習の支援を通じて新たな気づきを得たり、生徒に自社を認知してもらうことが将来の人材確保につながったりします。高校が企業に



協力をお願いするという考え方はなく、高校と企業が価値の交換をするわけです。地域の経済同友会や商工会議所などを窓口にするとういでしょう。

柏木 HAMAADA教育魅力化コンソーシアム（P. 19）では、市内の高校間の横の連携と、市立小・中学校との縦の連携を活用して、生徒は地域で学びを深めていました。

中森 校種間連携はもっと広まるとよいですね。高校生が小・中学生の教科学習や探究学習を支援することは一案です。高校生は小・中学生に教えることで自分の学びが深まりますし、小・中学生にとっては高校生がロールモデルになります。児童・生徒の交流を介して、教師も学校間・校種間で交流し、先ほど重要だとお話しした小・中学校の授

図 すべての生徒の学びの機会を保障するために必要なアクションと管理職の役割

学びを自己選択・決定できる仕組みの構築

教育課程の弾力的な編成、多様な選択科目の設置、学校設定科目の活用、自己調整学習の導入等により、生徒が自分の興味・関心や希望進路、自分に合う学習ペースに基づいて、必要な学びを自分で選べるようにする。

参考実践 ▶ 事例2 (P.13-15)、事例3 (P.16-18)

安心・安全な学びの場づくり

中学校や保護者からの生徒情報の収集及び校内での情報共有を徹底し、その情報も踏まえながら、ユニバーサルデザインの視点等も含めた授業設計、生徒の心情に配慮した声かけ等が行われる授業実践により、どのような生徒も安心して学べるようにする。

参考実践 ▶ 事例2 (P.13-15)、事例3 (P.16-18)

ICTを活用した遠隔授業の導入・実践

小規模校に通う生徒が、教師不足のために自校の教師による授業を受けられない科目等を自校にいながら、また、不登校の生徒や病室等において病気療養中の生徒などが学校以外の場所で授業を受けられるよう、ICTを活用した遠隔授業を導入・実践することで、すべての生徒の学びの機会を保障する。

参考実践 ▶ 事例1 (P.10-12)、事例3 (P.16-18)

多様な考え・価値観に出合わせる外部連携

探究学習等に取り組む上で必要な教育資源が少ない地域の高校などに通う生徒でも、高校間・校種間・地域等の外部と連携し、コーディネーターの仲介や、ICTを活用した遠隔教育・授業等も駆使しながら、多様な人と出会い、多様な考え・価値観に出合えるようにすることで、生徒の学びを広げ、深める機会を保障する。

参考実践 ▶ 事例4 (P.19-21)、事例5 (P.22-24)



管理職の柔軟なカリキュラム・マネジメント、リーダーシップ、ファシリテーションの下、上記のようなアクションを取り入れ、実行する

※各事例と本記事を基に編集部で作成。

柏木 学校ができることは様々あると言えそうですが、管理職の先生方にはどのような役割を果たすことが求められるでしょうか。

中森 教育委員会にいた経験から言うと、行政は基本的に前例がないことは是非を判断することが難しい立場にあります。校長の裁量で様々な挑戦をしてもいい、効果があれば全県に広めたいという思いがあります。校長の裁量は大きく、大概のことはできます。校長が先頭に立って積極的に挑戦すること

校長の裁量を最大限生かして、学びの機会を保障する

業見学などが行われれば、より多様な視点での授業改善が期待できます。

柏木 生徒が校外で活動することを心配する教師の声もあります。

中森 危機管理は重要ですが、生徒を学校の管理下に置くという考え方はなく、生徒が自分で危機管理できるように、校外活動時のルールを生徒と共有することが大切です。保護者の同意を得る、公共交通機関を利用するというルールを決めた上で、生徒に活動の自由を保障するのです。地域で活動するためには、日頃から地域と信頼関係を築いておくことも必要でしょう。

柏木 学校の変革の実現には現在の活動を生かすという視点が重要ですね。最後に、今後の学校のあり方について、中森先生の考えをお聞かせください。

中森 これまでの日本の学校は、自校内ですべての教育活動を完結させることが基本でした。しかし、学校は社会のシステムの一環にあります。全国の各校には、地域の他校や小・中学校、自治体、企業などと協働し、あるいは地域を超えて日本各地や海外ともつながりながら、柔軟なカリキュラム・マネジメントの下、生徒の多様な学びを支えていってほしいと思っています。

と、挑戦する学校づくりに向けて、互いに学び合う教師集団を築くことが、管理職の役割として重要なと考えます。

柏木 働き方改革が進む中、研修の時間を確保するのも難しいようですね。

中森 新たに研修を行うというよりも、教師が互いに日々の実践について語り合いながら、価値づけをしていくことが大切です。例えば、教師一人ひとりが自分が取り組んだ授業改善についてA4判1枚にまとめ、それらを学校全体で学期末などに共有して学び合う学校もあります。教師が互いに認め合い、次の挑戦を応援する、そんな学校づくりがますます求められているのではないのでしょうか。

主体的・
対話的で
深い学び

授業実践

地学

班で協力する調べ学習を通じて、
自分で学ぶ力、他者貢献の姿勢を育む



山形県立鶴岡中央高校

五十嵐雄大 いがらし・ゆうだい



同校に赴任して1年目。理科（地学）。1学年担任。
学習センター課。

学校概要

◎設立 1998 (平成 10) 年 ◎形態 全日制／普通科・総合
学科／共学 ◎生徒数 1学年約 240 人
◎2023 年度卒業生進路実績 国立大は、山形大、釧路立
大、岩手県立大、山形県立保健医療大などに 7 人が合格。
私立大は、東北学院大、獨協大、神奈川大、金沢工業大など
に延べ 61 人が合格。短大・専門学校等進学 111 人。就職 58 人。

私が
目指している
授業

今年度、本校に赴任して感じたのは、主体的に物事を進められない生徒が少なくないことです。部活動でも、生徒は顧問の指示を待っている状態でした。私は、自分で学習計画を立てたり、分からないことがあれば自分で調べたりするといった姿勢があつてこそ知識・技能が身につくと考え、前任校まで行っていたプリント中心の授業形態を変えました。前期は、私が生徒に問いかけ、生徒が答える対話形式にし、生徒が考える場を設けました。しかし、私が説明してしまう場面が多かつたため、後期は、生徒が班で協力して調べ学習をし、発表する課題を取り入れました。授業内で試行錯誤している生徒と同様、私も生徒に自分で学ぶ力を育む授業を目指して試行錯誤しています。

授業レポート

本時の概要

[対象] 2年生 [教科・科目] 理科・地学基礎

[単元] 火山

[単元目標] 地元の活火山である鳥海山について、岩石・地形・災害・文化の4つの切り口のうち、いずれかの切り口で説明することができるようになる。主体的に学習を進め、班での活動に貢献する。

[授業時数] 全10時間のうちの3時間目

ウェブサイトVIEWnext ONLINEでは、授業のダイジェストを動画で紹介!



単元の指導計画は、ウェブサイト『VIEW next ONLINE』でご覧いただけます。 <https://view-next.benesse.jp/view/cat/bkn-hs/> または右の2次元コードからアクセスしてください。



お勧めの分掌

管理職

教務担当

進路担当

担任

1 前時までの振り返り

🕒 12分間



五十嵐先生は、「主体的に学習を進める」「班で協力して学ぶ」といった本単元の目標を説明し、「皆で授業をつくろう」と呼びかけた。1時間目に行った、火山噴火を再現した2種類の実験について振り返った後、鳥海山を説明する切り口として挙げた岩石・地形・災害・文化のそれぞれの手がかりを示した。

2 班で調べ学習

🕒 18分間

本時のキー課題



前時に続いて生徒は班ごとに、班で選んだ切り口で鳥海山について調べた。文化を選んだ班は、景勝地・象潟が鳥海山の山体崩壊で形成されたことを調べた。しかし、鳥海山の噴火との結びつきが分からず、五十嵐先生に質問。すると先生は、「山体崩壊はなぜ起きたのだろう」と、生徒に問いかけた。

3 班で調べ学習

🕒 15分間

本時のキー課題



生徒は、「鳥海山は山体崩壊で今の形になったのなら、昔はもっと高かったのかな」「皆で調べてみよう」と、班で学びを深めていった。調べた内容をスライドにまとめ始めた班もあり、「写真を入れたら分かりやすい」と、見せ方を工夫していた。次時に向けて、調べる内容をメンバーで分担する班もあった。

4 本時の振り返りを入力

🕒 5分間



生徒は各自、本時で分かったことや気づいたこと、前時と比べて自分が変わった点などを、「授業記録シート」に入力。五十嵐先生は、「考えたことが正しいかどうか迷っても、前に進めていこう。間違っていたら、後で訂正できる。自分たちが考えたことを大事にしよう」と、生徒に伝えた。

発問・課題設定の観点



教科横断的な視点を
持てるよう、

4つの切り口を提示

火山がテーマの本単元では、本県と秋田県にまたがる活火山・鳥海山について、班で調べ、分かったことをスライドにまとめて発表することを課題にしました(図1)。

調べ学習の切り口として、岩石・地形・災害・文化の4つを提示。その中から班ごとに、生徒は切り口を1つ選びました。切り口の中に文化を入れたのは、文化が地形や気候などの影響を受けて発展してきたことを理解し、教科横断的な視点を

図1 本単元の指導計画(概要)

1 課題の目的と内容を説明

本単元の課題を説明した後、班分け。岩石・地形・災害・文化の中から、班ごとに調べ学習の切り口を選ぶ。火山噴火の仕組みを再現する2種類の実験に取り組む。

2~5 班ごとに調べ学習(本時は3時間目)

教科書、資料集、書籍、インターネットなどを活用して調べ、発表に向けたスライドを作成する。

6 班ごとにスライドを基に発表

各班4分間で発表。各班への質問や感想は端末に入力。それらを教師が班ごとにまとめた上で各班に渡し、後日の授業で班ごとに回答を発表。

※学校資料を基に編集部で作成。



写真 五十嵐先生は、紙コップに入っちはちみつにストローで空気を送り込み、ぶくぶくと泡立て、マグマの粘り気を再現した様子を生徒に見せた。生徒は1時間目にその実験に取り組んでいたが、生徒の思考を促すために再演した。

ほしいと考えたからです。文系的な要素を取り入れることで、理科が苦手な生徒も課題に関心を持てるようにする意図もありました。

本単元の1時間目は、火山噴火を再現した2種類の実験をしました。

火山噴火の仕組みを理解することができれば、それをきっかけに、生徒は班で学びを進められると想定していました。2時間目は、どこから手をつければよいか分からない様子でした。そこで、3時間目の本時は、4つの切り口のそれぞれについて、調べる手がかりを提示しました。机間指導では、生徒が自分で学習を進められるよう、助言は具体的なものにするように、ただし答えは言わないよう、心がけました(写真)。

学習評価の工夫



「授業記録シート」
の記述内容から
生徒の変容を見取る

毎授業の最後に、生徒は自分が変わったと思ったことなどを「授業記録シート」に入力します(図2)。その記述内容を見取り、「思考・判断・表現」や「主体的に学習に取り組む態度」を評価しています。

スライド(図3)の発表の中で質疑の時間を設けましたが、即興での議論が苦手な生徒もいるため、他の班への質問や感想を書いて提出させ

図2 「授業記録シート」生徒の入力例

<p>今日調べた本・サイト名 鳥海山・飛鳥ジオパーク</p>	<p>先生が言っていたこと 山体崩壊は2500年前に鳥海山で起こっていた。</p> <p>他の人が言っていたこと</p>
<p>今日気づいたこと・考えたこと・分かったこと</p> <p>知識・技能に関すること 鳥海山の山体崩壊は爆発的な噴火によって起こった。</p> <p>思考・判断・表現に関すること 主体性・他者貢献に関すること 鳥海山の山体崩壊の説明をスライドに記せた。</p>	<p>前回と比べて自分が「変わったな」と思ったこと</p> <p>知識・技能に関すること 鳥海山の山体崩壊のメカニズムを理解できた。</p> <p>思考・判断・表現に関すること 鳥海山は昔はもっと標高が高かったのではないかと考えた。</p> <p>主体性・他者貢献に関すること 自分から友だちに教えることができた。</p>

「今日気づいたこと・考えたこと・分かったこと」「前回と比べて自分が変わったと思ったこと」などについて、「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体性・他者貢献」の視点で記録する。
※学校資料を基に編集部で作成。

ました。そして、私が質問や感想を班ごとにまとめた上で各班に渡し、後日の授業で質問にどう答えるかを班ごとに話し合い、それを発表させました。自分たちが調べた内容に対して様々な指摘があったことに、生徒はやりがいを感じていたようでした。

中間考査では、本単元の学習内容を分野別に4段階で整理した資料(コラム参照)を基に、各分野の段階ごとに1題ずつ、「知識・技能」「思考・判断・表現」を見取ることができ、問題を出しました。生徒には自分が理解していると思う問題に取り組みせ、総合的評価の材料にはせず、形式的評価の材料にしました。

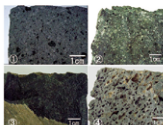
図3 生徒が班で作成したスライド(例)

【鳥海山の岩質について】

・鳥海山の主な岩質は**玄武岩質の安山岩**である。

？玄武岩質の安山岩とは？

安山岩は閃緑岩と同じく、ケイ酸分を中程度(60%程度)を含むマグマからできるが、閃緑岩はそれが地下深部でゆっくり冷えて固まるのに対し、安山岩はそれが地表近くで急に固まるなど、主に火山活動でできる。



玄武岩質とは地殻を構成する層のうち、P波(地震波)メートル程度の層のこと。

岩石を切り口に選んだ班は、鳥海山の主な岩質について調べ、各鉱物の特徴などをスライドにまとめた。
※学校資料をそのまま掲載。



生徒が自分で学びを進められるようにするための工夫

生徒が自分で学びを進める自己調整学習のような授業形態は、生徒も私も初めての挑戦です。どのような方法がよいのか模索中ですが、先行事例を参考に次のような工夫をしました。

●新しい授業形態を取り入れる目的を説明

生徒が目的意識を持てるよう、「自分で学ぶ力や周りとの協力して物事を進める力を身につけてほしいと考え、授業形態を変えます」と、1時間目に生徒に説明し、以降も各授業の冒頭などで繰り返し伝えました。また、知識の正確さはひとまず問わないので、自分が考えたように学びを進めるよう、説明しました。

●班の人数は4人とし、メンバーはランダムに組む

中学校時代までにリーダー的な役割を経験したことがほとんどない本校の生徒は、他人任せになってしまう傾向がありました。そこで、自分が責任を持つ経験ができるように、班での調べ学習を取り入れました。班は、人数が多いと他人任せになりやすいため、4人1組とし、席順で設定。普段はあまり交流のないメンバーもいる中で、自分は何ができるのか、何をすべきかを考えて行動することを期待しました。

●単元の学習内容を分野別に4段階で提示

前任教員まで生徒に取り組みさせていた自作のプリントの内容を、基礎(中学校既習)・標準(高校基礎)・応用標準(大学入学共通テストレベル)・応用(個別学力検査レベル)の4段階に整理し、本単元の調べ学習の資料として配布しました(右図)。本資料には、私がこれまで授業で説明してきた内容が詰まっています。

生徒は主にインターネットを使って調べますが、得られる情報量が膨大過ぎて、何が重要なのが判断できず、それらしい文章をコピー＆ペーストして

終わってしまいがちです。そこで、本資料が調べる手がかりになるのではないかと考えて作成しました。

●答えは言わず、生徒の思考を促す問いかけや説明をする

前期は私が説明し過ぎたという反省から、生徒の質問には問いで返し、生徒が自分で考え、答えを出すようにすることを心がけました。しかし、助言が具体的なものでなければ生徒が前に進めない場合もあり、その加減に難しさを感じています。

また、新たに問いを持てるように説明したつもりが、生徒に伝わっていないこともありました。例えば、2種類の火山噴火を再現した実験では、マグマの粘り気の違いによって噴出の勢いが変わることを説明しましたが、粘り気の違いはなぜ生じるのかといった疑問を、生徒が持つには至りませんでした。教師の理論ではなく、生徒の目線で問いかけや説明ができるよう、今後も研究を重ねていきたいと思っています。

■分野別に整理した本単元の学習内容(抜粋)

◎火山噴火の仕組み

基礎	マグマは軽いので上昇し、地表に達する。
標準	マグマは軽いので上昇し、地下約10kmの地点でマグマだまりを形成。その中で水蒸気や二酸化炭素が発泡することでさらに軽くなり、上昇して噴火する。
応用標準	地下100～140kmで発生するマグマは液体のため、固体の岩石よりも軽い。(中略)すると、マグマに気体が混じるために、全体の密度が下がって軽くなること、内部の圧力が上昇するために一気に上昇し、噴出する。
応用	液体は固体よりも分子・原子が動いていて、分子・原子間の距離が大きいため、通常は液体の方が密度は小さくなる(水は例外)。(以下略)

本単元は、「火山噴火の仕組み」「鉱物」「火山災害と火山の恵み」など、8分野ある。赤字にした箇所は重要事項で、五十嵐先生が色をつけた。
※学校資料を基に編集部で作成。

成果と展望

受け身の姿勢から、
少しずつ自分で考えて学びを
進められるようになってきた



「本単元では、班で調べてまとめたことを発表します」と、1時間目に説明した時、顔を上げて私の話を聞く生徒の姿に、今までと違う授業への期待を感じました。2時間目では、生徒は新しい授業の形式に戸惑っていましたが、3時間目の本時に「鳥海山の岩石の性質は何だろう」「十六羅漢を見たことはあるかな」など問いかけると、資料集を読んだり、インターネットで検索したりするなど、生徒の手が動き始め、「先生！」とあちこちから質問が出ました。「授業記録シート」を見ても、知りたいという生徒の意欲を感じました。生徒がただ聞くだけの授業から一歩前進できたと捉えています。

生徒が自分で学ぶ力を身につけ、知識・技能を習得していける授業づくりに、これからも試行錯誤して取り組んでいきたいと思っています。

お勧めの分掌

管理職

教務担当

進路担当

担任

主体的・
対話的で
深い学び

授業実践

数学

統計を活用して標本調査を設計する課題で、
数学を学ぶ意義を実感させる



東京都立両国高校・附属中学校

小笠原大峻 おがさわら・ひろたか



同校に赴任して4年目。数学科。2学年担任。

学校概要

- ◎設立 1900 (明治 33) 年
- ◎形態 全日制/普通科/共学
- ◎生徒数 1学年約 120 人
- ◎2023 年度卒業生進路実績 国公立大は、北海道大、筑波大、千葉大、東京大、東京工業大 (現・東京科学大)、名古屋大、京都大、九州大などに 53 人が合格。私立大は、青山学院大、慶應義塾大、上智大、早稲田大などに延べ 510 人が合格。

私が
目指している
授業

前任の中学校では、なぜ数学を学ぶのか、数学は自分の将来にどう役に立つのかを、生徒に考えさせる授業をしていましたが、難関大学志望者が多い本校においては、生徒の希望進路の実現を支援するため、大学入試に対応できる知識・技能の習得を重視した授業を行ってきました。しかし、2023 年度に私が初めて受け持った 1 年生は、例年よりも数学が苦手な生徒が多く、「数学は諦めた」「数学を勉強する意味が分からない」といった声がよく聞かれたため、授業方針を変えることにしました。私は数学を学ぶ楽しさを生徒に感じてほしいという思いを改めて強くし、数学で学ぶことが他教科や社会とどうつながっているのかが伝わる授業の実践を目指して、日々努力しています。

授業レポート

本時の概要

- [対象] 2年生 [教科・科目] 数学・数学B
[単元] 統計的な推測、推定
[単元目標] 目的に応じた標本調査を設計することができる
[授業時数] 全3時間のうちの3時間目
[本時の目標] 許容誤差の内容を理解し、「総合的な探究の時間」で行う標本調査の質問項目と調査対象者(標本の大きさ)の数を考える。



単元の指導計画は、ウェブサイト『VIEW next ONLINE』でご覧いただけます。<https://view-next.benesse.jp/view/cat/bkn-hs/>または右の2次元コードからアクセスしてください。



ウェブサイトVIEWnext ONLINEでは、授業のダイジェストを動画で紹介!



お勧めの分掌

管理職

教務担当

進路担当

担任

1 課題の提示

🕒 5分間



小笠原先生は、自分が設計した標本調査の結果を投影し、問題点がないかを生徒に尋ねた。生徒からは、「標本が小さい」「調査対象者に偏りがある」などの意見が上がった。それを受けて小笠原先生は、「では、どんな標本調査がよいのか、統計の知識を使って考えよう」と、本時の課題を提示した。

2 個人で標本調査を設計

🕒 13分間



本時のキー課題

前時の復習をした後、小笠原先生は許容誤差(*)について解説し、標本調査の設計には、質問内容、対象、推定される母比率、許容誤差、標本の大きさの5つの観点が必要であることを説明。生徒は探究学習で自分が標本調査を行うという設定の下、5つの観点について考え、その結果をワークシートに記入した。

3 班で各自の標本調査を検討

🕒 22分間



5つの班に分かれ、班内で話し合っ各自の標本調査をよりよくしていった。生徒は自分の探究学習の内容を班員に説明し、それぞれの内容に合った標本調査とするために、意見を出し合った。5つの観点を書き終わった生徒に小笠原先生は、「回収率についても考えてみたら?」と問いかけていた。

4 発表と振り返り

🕒 10分間



班内で最もよい標本調査を選び、そのワークシートを端末で撮影し、クラウドにアップしてクラス全員で共有。調査を設計した生徒は、質問内容や対象を決めた理由、設定した許容誤差の根拠などを発表した。最後に「班員と共有して気づいたこと」「本時の振り返り」をワークシートに記入した。

* 標本調査の結果と、母集団全体を調査した結果の誤差の範囲。標本調査のサンプル数を決める際に必要となる。

発問・課題設定の観点

学習内容が他教科や社会とどうつながっているかを実感できる課題に



担当学年には数学が苦手な生徒が多いため、生徒が数学を学ぶ意義を見いだせるよう、数学が他教科や社会とどうつながっているかを実感できる授業になる工夫をしています。

本時は、統計の知識を活用して探究学習で行う標本調査を設計する課題を出しました(図1)。生徒は必要に応じて探究学習で標本調査を行います。データの優位性や精度などを考えた設計ができていない調査がよく見られます。そこで、授業で学んだことを生かして信頼度の高

い標本調査を実施することができれば、生徒の探究学習がより深いものになると考えました。

ほかにも、絶滅危惧種の二ホンウナギが、今のままでは何年後に絶滅してしまうのかを、微分の知識で推測する課題や、交通事故が起きにくいカーブの角度を、積分の知識で導く課題などを検討しています。

また、生徒が自分の判断基準を持てるよう、折に触れて批判的な見方を示しています。例えば、真理であると思える平行線の公理に疑問を持たせ、球面幾何学など、非ユークリッド幾何学に考えを広げさせます。あたり前に思っていることでも本当に正しいのかと疑問を持つ。それによって、新しい考え方が生まれることを感じてほしいと思っています。

図1 本単元の構成

1 母平均の推定

目標 信頼区間を理解し、母平均の推定ができるようになる。

内容 標本平均の確率分布を復習した後、信頼区間の内容を理解し、母平均の推定を行う。

2 母比率の推定

目標 標本比率の確率分布について理解し、母比率の推定ができるようになる。

内容 標本比率が近似的に二項分布に従うことから、標準化できる流れを理解し、母比率を推定する。

3 自分で標本調査を設計し、アンケートを作成(本時)

目標 目的に応じた標本調査を設計することができる。

内容 許容誤差の内容を理解し、自分が取り組む探究学習に関する標本調査の素案を作成し、発表する。

※学校資料を基に編集部で作成。

図2 本単元のルーブリック(抜粋)

観点	評価項目	A	B	C
思考・判断・表現	質問の対象や母比率について	自分の質問内容に適した対象を考え、予想を基に母比率を設定している	自分の質問内容に適した対象を考えられているが、予想を基に母比率を設定できない(p=0.5と設定している)	自分の質問内容に適した対象を考えることができない
	許容誤差や標本の大きさについて	質問内容に沿って、現実的に可能な標本の大きさと許容誤差を考慮することができる	質問内容に沿って標本の大きさを決めることができるが、許容誤差を考慮することができない	標本の大きさを決めることができない

※学校資料を基に編集部で作成。

学習評価の工夫

テーマに合った標本調査を設計できたかで理解度を測る



学習評価は、単元ごとに作成している3段階のルーブリックを用いて行っています(図2)。「知識・技能」と「思考・判断・表現」の評価は、定期考査とワークシートで行います。定期考査では、暗記した知識を確認する問題にならないよ

う、なぜその解法にたどり着いたのか、生徒の理解度を見取るための記述式問題を中心に出題しています。本単元では、3つのサイコロを振り、どの面も同じように出るようサイコロが作られているかを仮説検定する問題などを出しましたが、正答率が低かったため、定期考査後の授業で補足説明をしました。

本単元では、重要なポイントを踏まえて標本調査を設計できているかをワークシートから見取り、許容誤差の概念を理解しているかを評価しました(コラム参照)。ポイントの1点目は探究テーマに合った質問内容が、2点目は質問内容に適した調査対象とし、母集団の傾向を踏まえた上で母比率を設定しているか、3点目は質問内容に応じた標本の大きさと許容誤差を設定できているかです。「主体的に学習に取り組む態度」の評価は、グループワークでの生徒の様子と、ワークシートの振り返りの内容を基に行っています。振り返りが単なる感想とならないように、振り返りの観点として、「今後役立たいと思ったこと」を書くよう、ワークシートに示しています。



探究学習に直接役立つ課題を設定

1・2年次の「総合的な探究の時間」では、生徒が4～5人ずつのチームを作り、自ら課題を設定して取り組む探究学習を行っています。以前は校外で行う標本調査を許可していませんでしたが、データの有意性を担保するため、2024年度からは、チームの担当教師の承認を得れば、校外でも標本調査を実施できるようにしました。そこで私は、統計的な推測の単元で、信頼度の高い調査の設計方法を学ぶ課題を出しました。

本時の授業で活動した班は探究学習のチームではな

いため、生徒は自分が取り組んでいる探究学習の内容を説明した上で、設計した標本調査について互いにアドバイスし合っていました。各班が発表した標本調査には、許容誤差の根拠があいまいなものや、標本の大きさが現実的ではないものがありました。質問内容的確で、本単元の学習内容を深く理解している様子もうかがえました(下図)。生徒が設計した標本調査の内容は、探究学習の担当教師に共有し、探究学習をより深めるために活用してもらえればと思っています。

■「宇宙開発事業への投資」を探究する生徒が設計した標本調査

☆質問内容
「潤沢な資金があれば宇宙開発事業に投資したいと思いませんか?」

☆対象
「投資家」
・対象を決めた理由
「投資をする人」500人中宇宙開発企業への投資を呼びかけるため

☆推定される母比率p
「40%」 0.40
・その値に推定した理由
「モヤリスがある成長産業であり期待を寄せている人が多いと思うから」

☆許容誤差
「4%」 0.04

☆何人に行うか(標本の大きさ)
「500人」 (576.24人)
・許容誤差と人数を決めた理由
「500人程度が標本調査には十分な数字で適切と思うので、その許容誤差は4%以下であるから」

☆班員と共有して気付いたこと
「回収率60%以上で1000人に達する許容誤差と調査人数のバランス」

☆本時の振り返り
統計的な推測を学習して、感じたことや今後役に立たせたいと思ったことなど、かなり面白い範囲だった。実生活に役立つ課題を探しているところから、他の高校数学より幅広いと思うのでわくわくした。統計資料を見るときは、どのくらい信頼幅があるのかを計算してみてもよいかと考えた。

小笠原先生の評価「標本の大きさが500人とやや多めですが、NHKが実施した、ある選挙に関する調査の回収率が57～60%だと調べた上で、1000人に調査を依頼すると500人程度の回答が見込めることを生徒が説明。母比率や許容誤差の設定に根拠がありました」

※学校資料を抜粋して掲載。

■「グラスフラワー」を探究する生徒が設計した標本調査

☆質問内容
「家に飾りたいお花が枯れたら、そのお花を育ててほしい?」

☆対象
「両国に通う生徒の親と配偶者の先生」
・対象を決めた理由
「親や家族を呼んでいる大人の人だから、お花を育てたり、お花を飾ったりと管理をしてくれる人と民、だから」

☆推定される母比率p
「10%」 0.10
・その値に推定した理由
「ほとんどの人がお花を育てると思ってるから」

☆許容誤差
「1.96 * sqrt(0.10 * 0.90) / 400 = 1.96 * 0.30 / 20 = 0.0294」 2.94%

☆何人に行うか(標本の大きさ)
「400人」
・許容誤差と人数を決めた理由
「3学年+先生を呼ぶなら200くらい、PRや70、100、4年生+先生に回答してもらおう」

☆班員と共有して気付いたこと
「全ての調査可能な親を平均数に1万まで」

☆本時の振り返り
統計的な推測を学習して、感じたことや今後役に立たせたいと思ったことなど、探究のよさ、お花のデザインを教えることがあったから、このお花の存在を聞いていくと良かった。

小笠原先生の評価「標本の大きさが400人とやや多めですが、調査対象が非常に現実的でした。『主婦や既婚者であれば、日常的に花とかかわりがある』と理由が明確であり、本校の保護者や教師を調査対象に含めているので、高い回収率が見込めます」

※学校資料を抜粋して掲載。

お勧めの分掌

管理職

教務担当

進路担当

担任

今後の課題は、発展問題に取り組むなど、深く考える時間を確保することです。現在は大学入試への対応のため、授業の進度を速めていることから、その時間が十分ではありません。進学実績を維持しつつ、数学の面白さや楽しさが生徒に伝わるよう、他教科と連携するなど、これからも授業を工夫していきます。

成果と展望
数学が苦手でも、
意欲的に取り組む
生徒が増えた



地域創造、地域人材の育成、地域定着。 それぞれの想いをつなげ、生徒の活動を支援

新潟県立長岡向陵高校



学校と地域をコーディネート
グローバルマーケティング株式会社

ゆか
大澤容佳
産学連携推進室室長。

学

生徒の探究学習をデザイン
新潟県立長岡向陵高校

中村直子

同校に赴任して2年目。
進路指導部総合探究班。

官

地域での学びの場を提供
長岡市役所

ましまあきひろ
間嶋晃洋

地方創生推進部
ミライエ長岡企画推進室
事業担当課長。

〈長岡向陵高校の探究学習〉同校は2024年度から、それまでの探究学習を体系化した「SKIP (聡慧探究プロジェクト)」(*1)を実施。生徒は、1年次1学期は身近な人の悩みなどを基に設定した課題に、2・3学期は企業・大学等から提示されたミッションにグループで取り組む。2年次は大学・企業等のメンターから助言を受けながら、生徒が自ら地域の課題を見いだして探究する。3年次は2年間の探究学習をまとめ、希望進路の実現につなげる。いずれも校外の多様な人とかわりながら探究学習を深めていくのが特徴だ。



大澤 地域創造をミッションに掲げ、地域企業のマーケティングや人材採用・育成

地域で熱い想いを持って働く大人と生徒をつなぐ

探究学習にこうかわった

私は23年度に本校に赴任し、その取り組みに大きな可能性を感じました。地域や企業が抱える問題を解決するためには、現場を見て、そこにかかわる人の想いを知ることが重要です。それを実現できる同社の協力は得がたいものです。探究学習だけでなく、生徒が校外の多様な大人と出会い、生き方や働き方を考えることができる機会を増やそうと、年間を通じて様々な魅力的な大人と出会う機会を設けています。



中村 本校は、2020年度から「総合的な探究の時間」を先行実施し、グロー

大人の様々な想いや生き方に、生徒が触れる機会を設けたい

つながりの目的

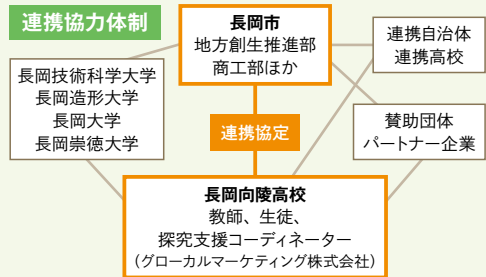
*1 So-Kei Inquiry Project の略。同校が生徒会を「聡慧会」と呼ぶことに由来する。

などを支援する当社は、21年に産学連携推進室を設けました。同校からは、年間を通じた探究学習の支援を委託されています。1年次は、生徒の興味・関心を基に設定したテーマに該当する地域企業等を選んで協力を打診し、企業等の想いや抱えている課題を踏まえつつ、生徒が熱中しそうなミッションを一緒に考えます。例えば、株式会社プラントフォーム（*2）は「廃棄野菜を活用した商品の考案」、長岡市観光企画課は「雪国植物園の魅力を若い層にも伝えるPR素材の作成」をミッションにしました。2年次は、生徒の希望進路が多い分野を中心に大学教員等から助言を受け、個人探究を進めます。大切に行っているのは、目的や想いを共有し、企業、学校、行政など、かかわるすべての人々のニーズに合致する三方よしのコーディネートです。

また、生徒だけでなく先生方にも探究の場をご提案し、産学官金が集う展示会「MatchingHUB長岡」に、同校は23年からご出展いただいています。過去の開催実績を見ても、高校としては同校が唯一の参加です。探究学習の認知拡大に加え、連携企業等の開拓にもつながり、先生自ら挑戦される姿勢に私たちも感銘を受けました。

つながりのPoint 連携協力体制の構築

2024年3月、同校は長岡市と「探究学習の推進に関する連携協定」を締結。それを機に、既に連携していた市内4大学や地域企業との連携体制をさらに強化した。それにより、大学・企業から同校へのメンターの協力を得られるようになったり、生徒が調査活動などで市の施設を利用する際の手続きがしやすくなりました。また、大学と連携した講演も行いやすくなっています。24年度は、長岡造形大学の板垣順平准教授が1・2年生を対象に「デザイン思考」の講演を実施。探究学習に活用できる、新たな価値を探究し、創造するためのアプローチの方法などを、生徒が学ぶ機会となった。



※学校資料を基に編集部で作成。

間嶋 本市は、未来の地域を担う若者の定着が課題です。進学等で本市を離れてもいずれ戻ってきてもらえるよう、小・中学生に郷土愛を育む取り組みを行っています。高校生にも本市の産業や企業を知ってもらい、将来、職業を選ぶ際の選択肢の1つにしてほしいという想いから、大澤さんからの提案を快諾し、同校の探究学習に参画しています。

私は学校連携に関する市役所内の窓口を担当しており、同校の希望に合った課や職員を選んで講師を依頼したり、探究学習に役立ちそうな市の施設

や制度を紹介したりしています。例えば、今年度は、高校生や大学生等が取り組む市の活性化活動に上限5万円を補助する制度を設けました。それを同校に案内したところ、4件が採用され、生徒発案の講座やイベントが実現しました。また、市民向け講座を行う「まちなかキャンパス長岡（*3）」は、同校の生徒の企画を支援し、生徒が探究学習で得たAや食品ロスの知見を生かした講座を開催しました。市と学校をつなぐ役割の方がいることで、私は市役所内の取りまとめに集中し、学校の想いに沿った支援ができています。

今後の探究学習を展望する…… 担当者が異動しても連携を 継続できる仕組みを築く



中村 地域に精通している方の支援により、魅力的な特徴を持つ企業等の方々に

出会えました。様々な大人の想いや活動に刺激を受け、校外でイベントを開催したり、ワークショップに参加したりと、多様な活動をする生徒が徐々に増えていきます。そうした生徒を支え、より広い視点を示すため、「探究通信」を作成し、1年生の生徒や教師、ミッションを提供してくださる講師に発信しています。長岡市や市内の大学・企業との連携協力体制は強化されましたが、私も含め、担当者はいずれ異動します。枠組みが形骸化せず、生徒が地域と連携した探究学習を継続できるようにすることが、今後の課題です。

学校概要

設立 1983（昭和58）年
形態 全日制／普通科／共学
生徒数 1・2学年約200人、3学年約240人
2023年度卒業生進路実績
国公立大は、上越教育大、新潟大、富山大、信州大、埼玉大、三栄市立大、長岡造形大、新潟県立大、新潟県立看護大などに64人が合格。私立大は、大東文化大、東洋大、日本大などに延べ98人が合格。

* 2 魚の養殖「Aquaculture」と野菜の水耕栽培「Hydroponics」を組み合わせた「アクアポニックス」に取り組む長岡市の企業。
* 3 長岡市内の4大学1高専と市民及び同市で構成する協議会が運営する「学びと交流の拠点」。

事例で深める!

学習評価

実践校の取り組みを基に、
学習評価をより充実させるポイントを
田村先生がアドバイス

北海道当別高校

生徒の振り返りレポートを分析し、 非認知能力の形成的評価に活用



解説者

文部科学省 初等中等教育局
主任視学官
田村 学 たむら・まなぶ

専門は教科教育学、教育方法学、カリキュラム論。文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官、同省同局視学官、國學院大學教授などを経て、現職。著書に、『学習評価』（東洋館出版社）など多数。

**振り返りを価値づけし、
生徒に学びの成果を自覚させる**

田村 貴校は2024年度から、非認知能力の育成を目的として、学校独自の評価表を作成し、「総合的な探究の時間」(以下、総合探究)において運用しているそうですね。

古谷 生徒が自身の非認知能力の変容を認識することができるよう、探究学習の振り返りを工夫しています。「ALACTモデル」(図①)に基づき、生徒の振り返りレポートの中から、「振り返り」と「気づき」の行動変容が期待できる「行為の選択肢の拡大」にあたる記述にそれぞれ赤・青・緑の色をつけて視覚化するとともに、質問などを添えて振り

返りを返却しています(図①)。

田村 評価の指標を教師間で共有することで、教師は根拠をもって生徒へのフィードバックをすることができると、教師による評価のぶれが小さくなりますね。

切江 今年度の夏季休業中に総合探究担当の教師が集まり、古谷先生が色分けした1年生の振り返りレポートを見て、抽出箇所や色分けに問題はないか、話し合いました。そうして、評価の観点を教師間ですり合わせることができました。

**目標と振り返りを照らし
合わせて行動変容を促す**

古谷 探究学習の目標としている

北海道当別高校プロフィール



左から/古谷知之(総合的な探究の時間デザインチーフ、数学科)、保格秀規(校長)、切江智大(地理歴史・公民科、学習支援部)

設立 1949(昭和24)年
形態 全日制/普通科・園芸デザイン科・家政科/共学
生徒数 1学年約50人
2023年度卒業生進路実績 4年制大は、札幌大、札幌学院大、札幌国際大、藤女子大、北翔大、北海道情報大に延べ8人が合格。短大・専門学校進学22人。就職16人。

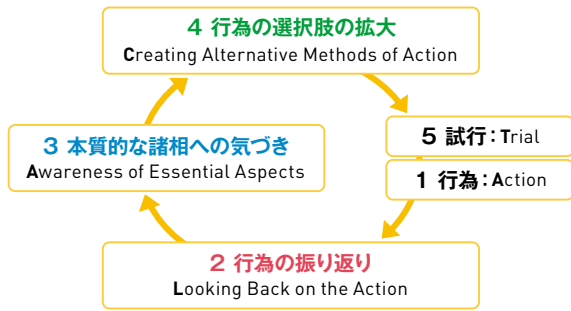
「EViCテーブル」(図②)は、23年度に生徒が書いた振り返りレポートの中から、生徒に目標にしてほしいことを51項目に整理し、本校が育成を目指す6つの資質・能力に分類したものです。生徒が理解しやすい目標にしようとして、生徒が使った言葉を採用しました。また、目標に盛り込む動詞はできるだけ1つにし、人によって解釈が異なることにならないようにしました。

田村 生徒目線で目標を設定している点や、1文の中の要素を少なくして、評価者が迷わず判断できるようにした点が素晴らしいですね。

*1 オランダの教育学者フレット・コルトハーヘンが提唱した省察のプロセスのモデル。ALACTは、図に示した1~5の頭文字を取ったもの。
*2 Empirical Viewpoints for Competencyの頭文字を取ったもの。

図 非認知能力の育成に向けた探究学習の評価方法

●省察の理想的なプロセス「ALACTモデル」を活用
行為と省察のプロセスが5つに分けられている。



振り返りレポートの分析 ↓

① 生徒の次の行動につながるよう、生徒にフィードバック

教師は生徒の振り返りレポートを読み、「2 行為の振り返り」「3 本質的な諸相への気づき」「4 行為の選択肢の拡大」に該当する記述に赤・青・緑の色をつけ、質問やコメントを添えて生徒に返却する。例えば、赤の記述がない場合は、「あなた自身はどのような体験をし、何を感じましたか」など、青の記述がない場合は、「あなた自身の体験から、どのような気づきを得ましたか」などとコメントを添える。色をつけることで、今まで規準が曖昧だった生徒へのフィードバックを、「赤を引き出す」「青を引き出す」という観点で行えるようになった。また、生徒が自身の行為や考えを言語化したものを教師が価値づけすることで、生徒は自己肯定感を高めたり、次の行動を考えたりすることができる。

(当別町の企業との対話イベントに参加した生徒の振り返りレポート)

今回の「総合的な探究の時間」で私は、決めていた質問を時間が足りなくて言えなかったことがありました。一方で、決められた質問以外に、その場に見合った質問をすることができました。それに対して、私は満足していました。ただ、私ともう1人の2人だけが手を挙げていたので、その時はほかの人からも「質問してくれー」と思っていました。でも、今しっかり考えると、決めていた質問をあらかじめ共有していなかった自分に非がありました。また、私は今回、うなずきながら人の話をしっかり聞きましたが、正直、どんな話だったのか覚えていないところがあります。聞いたことと学んだこととは全く違うと思うので、このままでは駄目だと思いました。

次に企業の方々とかかわる時には、話を聞くだけではなく「なぜこうなるのか」「なぜこうしないといけないのか」をしっかりと考えていこうと思いました。

② 探究学習の目標「EVICテーブル」を作成

2023年度の探究学習で生徒が書いた振り返りレポートの中からALACTモデルの「4 行為の選択肢の拡大」に該当する記述を中心に抜き出し、51項目に整理。同校が育成を目指す6つの資質・能力に分類した。同テーブルは教師及び生徒に共有。探究学習に取り組む際、教師は事前に51項目の中から1項目を生徒に提示して目標を意識させ、活動後には「今日の目標は○番でした。あなたはできましたか」と、生徒に自己評価させている。また、生徒は学期末や年度末に51項目を4段階で自己評価する。

目標の設定	項目	内容
尊敬心	1	日常生活でも心のコップの向きを気にしながら過ごす
	9	人も自分も褒められる
課題解決力	10	最後まで粘ってやる。目標を持ったのなら、最後まで逃げずに責任を持つ
	16	どんな解決方法を取るかを考える
自己肯定感	17	自分の悪いところばかりを見ているんだなと気づく。自分を否定し続けるのはやめる
	24	自分でも行動すると今の社会にかかわれると実感を持つ
協調性	25	好きとか嫌いとかが自分の中にあっても、上手に人とつき合う
	34	メンバーに対して、雰囲気考えた上で行動・発言が変わるような指摘をする
積極性	35	話さないといけな環境に自分を置く。自分にやらなければいけないと言いつけて行動する
	41	ネバギバ!や学校外のコンテストに参加する
探究力	42	予定→実行という流れをつくる
	51	他の人の言葉に影響を受けて自分のことを考える

①と②を組み合わせ
評価をブラッシュアップ!

田村先生からのアドバイス

生徒の振り返りレポートをEVICテーブルと照らし合わせて確認することで、例えば、「Aさんの振り返りには、『尊敬心』に関する記述が多い」などと、探究学習での成果を、学校が育成を目指す6つの資質・能力の観点で評価できます。教師は探究学習でも、学校が育成を目指す資質・能力を意識した支援ができますし、生徒もそれらを自覚することができま。また、EVICテーブルを学力の3要素とつなげられれば、総合的評価にも活用することができるでしょう。

※学校資料と取材を基に編集部で作成。

EVICテーブルは、総合的評価にも活用しているのですか。

切江 現在は、活動ごとに1項目を目標として生徒に提示したり、生徒の自己評価に用いたりして、形成的評価のみに活用しています。

田村 学校が育成を目指す6つの資質・能力と学力の3要素の関係を明らかにしたいですね。それによって、EVICテーブルによる評価が、学校が育成を目指す6つの資質・能力を介して、観点別学習状況の評価につながります。その上で、生徒の振り返りレポートをEVICテーブルで評価すれば、その結果は、EVICテーブルが学校が育成を目指す6つの資質・能力とつながっていることで、観点別学習状況の評価に生かされます。妥当で信頼できる総合的評価の実現に向かいます。

保格 田村先生のお話から、EVICテーブルによる評価は、非認知能力の育成と総合的評価に活用できるものになると感じました。その方法が教科学習の評価にも活用できるよう、研究を重ねていきます。

お勧めの分掌

管理職

教務担当

進路担当

担任



実践型教育の推進

生徒主体で活動する枠組みを整備。 生徒の変化を受け、教師も意識転換を図る

埼玉県・私立西武学園文理中学・高校

1分
で分かる軌跡

埼玉県・私立西武学園文理中学・高校は、2023年度に着任したマルケス・ペドロ校長の下、生徒主体の実践型教育を本格化させた。課題の設定や計画の立て方などを学ぶ正課の探究学習と、生徒が自分で活動を計画して実践する課外の「ガチ・プロジェクト」を両輪として、主体性や行動力などの非認知能力の育成を図っている。スマートフォンの校内での使用ルールを定めたガイドラインを生徒が発案して作成・運用するなど、自ら考えて行動する生徒が増えつつある。

#理論を学ぶ探究学習

#実践あるのみのガチ・プロジェクト

学校概要

設立 1981(昭和56)年
形態 全日制/普通科・理数科/共学
生徒数 1学年約380人
2023年度卒業生進路実績
国公立大は、北海道大、東北大、筑波大、埼玉大、東京外国語大、名古屋大、九州大などに41人が合格。私立大は、獨協医科大学、青山学院大、慶應義塾大、上智大、中央大、津田塾大、東京理科大、日本獣医生命科学大、日本女子大、明治大、立教大、早稲田大などに延べ554人が合格。



校長
マルケス・ペドロ
同校に赴任して2年目。



副校長
若田 博
わかた・ひろし
同校に赴任して31年目。
理科(生物)。



教頭
四十万 俊幸
しじま・としゆき
同校に赴任して24年目。
外国語科(英語)、国際教育部。



主幹、進路指導部
岡村 陽子
おかむら・ようこ
同校に赴任して23年目。
国語科、探究学習担当。



プロフェッサー
永嶋 稔久
ながしま・としひさ
同校に赴任して37年目。
数学科。

変革の背景

**探究学習には
実践こそ必要**

埼玉県・私立西武学園文理中学・高校は、難関大学合格者が毎年多数出る一方、何事にも受け身的で、希望進路を自ら見いだせない生徒が少なくないという課題があった。そこで2021年度、学校が所在する狭山市が抱える問題に対して生徒が解決策を提案する探究学習を導入し、主体性などの非認知能力の育成に力を入れ始めた。その動きは、23年度にマルケス・ペドロ校長が着任してから加速した(※1)。

「本校の探究学習は、問題の解決策を発表することがゴールになっていて、解決策の実践までには至っていませんでした。しかし、社会では実践こそが求められますし、非認知能力は社会の中で試行錯誤して磨かれていくものです。それらのことから、生徒が自分で考えた解決策を社会で実践する場が必要だと考え、教育活動を見直しました」(ペドロ校長)

変革の一手 ①

**地域課題に取り組みながら
自分の興味・関心を見いだす**

1・2年次の「総合的な探究の時間」は、探究学習を通じて、生徒一人ひとりが、自分が興味・関心のある物事を明らかにし、主体性などの非認知能力を高めることを目的とした。1年次は、生徒は3〜4人のチームを組み、課題の設定の観点や調査の進め方などを「探究ナビ」(※2)で学びながら、狭山市をより魅力的なまちにするプランを、フィールド

ワークなどを通じて作成。毎年2月の探究発表会「さやまアクションプランコンテスト」で、代表チームが企画したプランを発表する(図1)。チームは、所属クラスや性別が異なるメンバーから構成されるよう、教師が編成。同校は希望進路別にクラスを組んでいることから(※3)、属性が異なる生徒で活動させることにより、協働性を育もうと考えた。探究学習担当の岡村陽子先生は、1年次の探究学習のねらいをこう語る。「狭山市内という決められた範囲で物事を深く観察すれば、自分が何に興味・関心があるのかを見いだしや

図1 探究学習 1・2年次 年間計画概要

1年次	4月	市内を流れる入間川のほとりを歩き、地形やまちの成り立ちなどを感じる
	6月	憧れのまち・住みたいまちのイメージから理想のまちを考える
	7月	現地調査などで狭山市の魅力や課題を知る
	9～1月	狭山市をより魅力的なまちにする方法を考え、提案書を作成
	2月	代表チームが探究発表会で発表
2年次	4～8月	個人・チームで課題を設定し、調査を行う
	9月	中間発表会
	10～1月	個人・チームで課題に取り組み、発表会に向けて論文・レポートをまとめる
	2月	代表者・チームが探究発表会で発表

1年次の探究発表会「さやまアクションプランコンテスト」で最優秀賞を獲得したチームが、2年次の探究学習で自分たちの企画を形にし、制作した絵本。主人公が狭山市のイメージキャラクター「おりびい」と市の魅力を発見する物語だ。

※学校資料を基に編集部で作成。

※1 ペドロ校長のインタビュー記事をウェブサイト『VIEW next ONLINE』に掲載しています。右の2次元コードからアクセスしてください。
 ※2 ベネッセの教材の1つで、実社会で必要な力を身につけるための探究実践のワザとコツが分かる教材。
 ※3 2024年度から、先端サイエンスクラス、アカデミックチャレンジクラス、アカデミックマルチパスクラス、デュアルクラス、クリエイティブクラス、スポーツクラスの6クラス。2025年度にアートクラスが新設される。



お勧めの分掌

管理職

教務担当

進路担当

担任

すいのではないかと考えました。また、専門性や価値観が異なる生徒が一緒に活動することで、自分にはない気づきや発想に触れ、視野が広がるきっかけになることも期待しました」

2年度からは、1年次の経験を生かし、個人またはチームで課題を設定して探究学習に取り組む。生徒やチームによっては、すぐに実践に進むこともある。例えば、「さやまアクシヨンプランコンテスト」で最優秀賞を得たチームは、学校からの支援金を使って、市の魅力を紹介する絵本の制作や、狭山茶で入浴剤を作るワークショップの開催を実現させた。

また、2年度になると、生徒が設定する課題が多様になるため、担当教師の分担を工夫している。

「個人で課題を設定し、熱心に取り組みそうな生徒は、コミュニケーションが得意で、探究学習の支援に意欲的な教師が担当するようにしています。活動計画が見通しやすい課題を設定したチームには、探究学習の支援の経験が浅い教師が就くようにしています。そして、活動の進捗を学年全体で共有する中間発表会などを行い、生徒、教師ともに、探究

学習の進め方や視点などを学び合えるようにしています」(岡村先生)

変革の一手 ②

生徒の実践あるのみの「ガチ・プロジェクト」

24年度からは課外活動として、本物(「ガチ」)の社会をイメージして生徒が活動する「ガチ・プロジェクト」を導入した。全部で10あるプロジェクト(図2)には、いずれもカリキュラムはなく、生徒が自ら目標を立て、企画を考え、実践する。同プロジェクトの運営リーダーを務める永嶋稔久先生が、長らく温めてきたその構想をペドロ校長に相談したところ、一気に具現化に至った。

「私は以前から、生徒が『絶対に無理』と思っていることを実現させて、その状況を目のあたりにした生徒に『自分も行動すれば実現できる』という思いを持ってほしいと考え、環境をつくったり、実績を築いたりしてきました。本プロジェクトも、生徒の挑戦を後押しする場です」

各プロジェクトには、その分野で

探究学習 生徒の声

エシカル商品(*4)の購買行動にデザイン面から迫る

クリエイティブクラス1年 吉岡優里さん



中学生の頃から、社会人になると知識よりも非認知能力の方が大事になると思っていた私は、本校に探究学習に力を入れるクリエイティブクラスがあることを知り、入学しました。私の探究テーマは、「社会問題の解決につながるエシカル商品などの購買行動に、商品パッケージの色やデザインがどう影響するか」です(*5)。絵を描いたり、デザインしたりすることが得意という自分の強みを生かして、社会の役に立ちたいと考えました。校外でも探究学習を深めようと、大学生が運営する、高校生の探究学習を支援する団体を自分で見つけて参加を申し込み、大学生や大学教員から支援を受けています。

探究学習を始めて約2か月ですが、高校の先生や大学生、大学教員といった様々な人の意見を聞くことで、自分の視野が広がりました。今後は、もっと自分から行動できるようになって、私がパッケージをデザインしたエシカル商品などを開発したいと思っています。



自分でデザインをしたパッケージ案を使って購買意欲を調査した。

図2

「ガチ・プロジェクト」(例)

ドラマ・映画収録プロジェクト	ドラマや映画、CMなど、校内での撮影を誘致し、制作会社と事前準備を進め、円滑に撮影できるよう、サポートする。
ポッドキャストプロジェクト	番組の企画を立て、配信場所の設定や脚本作成、演出など、番組を制作して日本や世界にリアルタイムに配信する。
アントレプレナー(起業家)プロジェクト	資金調達や税金、法律などの知識を学び、会社やNPOを設立するなど、高校生起業家を目指す。

全部で10のプロジェクトがあり、全校生徒の約6割が参加。複数のプロジェクトで活動する生徒もいる。



写真1 スポーツデータ分析プロジェクトは、プロが活用するデータ分析ソフトを使って動画の解析などをし、運動部を科学的見地から応援する。



写真2 ハロウィンイベントプロジェクトは、学校を会場にして、地域住民向けのハロウィン祭りを開催。同プロジェクトに参加する100人余りの生徒がすべて企画・運営した。

※学校資料を基に編集部で作成。

*4 人や社会、環境に配慮した商品。

*5 探究学習を重視するクリエイティブクラスは、生徒が1年次から個人で課題を設定して探究学習に取り組む。

活躍する社会人が参画し、生徒の活動を支援している。例えば、アントレプレナー（起業家教育）プロジェクトでは、起業を経験した社会人が来校し、生徒の相談に乗っている。

「将来、生徒が社会で必要となる力を高校の時から少しずつ育てていきたい。そのためには、社会で活躍する人からの助言が生徒に最も有効だと考え、その環境を用意しよう」と、本校の教師の人脈などをたどって、協力者を探しました（永嶋先生）

ガチ・プロジェクトでは、生徒は実践を通して試行錯誤しながら目標の達成を目指す。例えば、ハロウィンイベントプロジェクトは、24年10月末に、地域住民向けのハロウィン祭りを狭山市と協働して実施。出し物や会場の飾りつけ、広報など、祭りにかかわるすべての活動を、生徒が自治体やイベントと話し合いながら企画・運営した（写真2）。2日間で約4000人が来場。お化け屋敷やシューティングゲームでは、1時間待ちの行列ができた。「祭りは大成功でしたが、生徒は『待ち時間を解消するためにはどう

すればよかったのか』と課題を見つけ、早くも来年に向けて動き出した。実践を通じて、社会で生きる力が生徒に育まれていることを実感しています」（ペドロ校長）

変星の成果と展望

教師は答えを言わないを、いかに徹底するか

ペドロ校長は23年4月の着任時、「校内で改善してほしいことがあれば教えてください。一緒に学校を変えていきましょう」と、全生徒にメールを送った。それに対して、スマートフォン使用禁止の校則に関する意見を送った生徒が発起人となり、生徒主体でガイドラインが作成され、校内でのスマートフォンの使用が可能となった（下記コラム参照）。そのように、自ら発案して行動する生徒の登場や、探究学習及びガチ・プロジェクトの展開が相まって、受け身的だった生徒が変わりつつある。2年生が地域の自治会と話し合い、地域住民の家の庭掃除などのボ

生徒発「スマホ校則改正プロジェクト」

学校生活での疑問から動き出した

プロジェクトマネージャー
デュアルクラス3年 池田大空さん



スマートフォンは校内での使用は禁止。でも、ほぼ同じ機能を持つタブレット端末は使用してもよい状況に疑問を持っていました。ペドロ校長からのメールを読み、校則を変えることはできないか、ペドロ校長に相談した上で、2023年5月に「スマホ校則改正プロジェクト」を立ち上げました。スマートフォンを校内で使用可能にするためには、使用ルールを定めたガイドラインが必要であり、その作成に向けては、生徒、保護者、先生の意見を聞くべきだと考えました。そこで、有志の生徒約50人で分担し、スマートフォンの校内での使用可否と、その理由を、生徒と保護者にはアンケートで、先生には直接話して、聞きました。加えて、他校約60校の状況も調査。それらの結果を踏まえて、「授業中や集会中など、誰かが全体に向けて話している時は、特別な指示がない限り、使用は禁止」など、使用を禁止するケースを明文化し、違反時の罰則を定めたガイドラインを6月末に完成させました。そして、生徒、保護者、学校の承認を経て、9月から運用を開始しました。

本プロジェクトの活動を通じて、課題を構造的に捉える力や合意形成に向けて対話する力などが身についたと感じています。現在はこの経験を生かして、1年生が取り組んでいるアルバイトに関するガイドラインの作成に助言をしています。

ランティアを始めたり、1年生がアルバイトに関する校則改正に動き出したりする中、教師も変わらなければならぬと、四五十万俊幸教頭は語る。「探究学習やガチ・プロジェクトでも、生徒が悩んでいると、教師は『こうすればいい』と解決策を言うてしまいません。しかし、それでは教師主導の指導と同じです。生徒への支援のあり方について、根本的な意識改革が教師に求められていると感じます」

若田博副校長はこう言葉を継ぐ。「教師が長年守ってきた指導方針を転換することは容易ではなく、常に生徒主体の考え方を貫けているわけではありません。私たちが管理職も、悩む教師を目の前にすると、生徒同様、解決策を言うてしまいがちです。それを改め、自分の頭で考える教師集団をつくり、生徒が教師さえも超えるような成長を遂げられる環境を築いていきたいと思っています」

お勧めの分掌

管理職

教務担当

進路担当

担任

昨年度の度数分布を用いて、 生徒の位置と合格可能性を確認

大学入学共通テスト（以下、共通テスト）の結果が芳しくなかった生徒は、志望校判定の結果を見ると、自信を失いがちだが、判定だけで出願先を最終決定せずに、度数分布（図1）を用いて、生徒に自分の位置をしっかりと確認させることが重要だ。例えば、D判定だった場合、度数分布を確認して、自分がE判定に近いD判定なのか、C判定に近いD判定なのかを確認した上で、昨年度の入試で、自分と同じような位置から合格した受験生の数から、より詳細な合格可能性を生徒には把握させたい。

なお、今年度は、現行の学習指導要領に対応した初めての入試であり、共通テストの出題科目に「情報Ⅰ」が新設されるなど、昨年度と配点が変わっている募集単位が少なくない。度数分布の見方は従来と変わらないが、昨年度の志望者度数と昨年度の入試結果における合否度数分布については、今年度の配点に換算して表示されていることを認識しておきたい。

確認ツール

- 大学入学共通テスト自己採点集計データネット 2025 (以下、データネット) サイト>度数分布マクロ
- Compass >判定シミュレーション>度数分布出力

図1 Compass 度数分布とその見方

上から

- 傾斜集計による判定値 (左からA B C D)
- 共通テストと個別学力検査の配点
- 第1段階選抜での予告倍率、通過予想得点/配点
- 一般選抜の募集人員、昨年実質倍率

データネット自己採点集計の志望者度数分布

左から

- 各募集単位の教科配点で集計した得点
- 判定値
- 今年度、昨年度の志望者度数 (各日程内における第1志望を集計、表示は累積度数)

上から

- 今年度、昨年度それぞれの合計志望者数 (各日程内における第1志望)
- 今年度、昨年度の平均点及び得点率

第1志望〇〇大前 (受験カード志望校)

2025年				
基準	600	B	580	550 520
共予: 2次	1000		: 1400	
1段階	倍 (/)			
定員	29	2024年度倍率		2.3
得点	今年	昨年	2024年度	
			合格	不合
640	18	37		
630	26	41	1	
620	35	43	A	1
610	38	44	2	
600	A	48	B	5 1
590	39	49	3	3
580	B	42	51	1 3
570	43		C	4 4
560	47	52	1	4
550	C	48	55	1 9
540	51			1
530	56	56	D	2
520	D	60	58	1
510	62	59		1
500	66			2
人数	112	61	26	32
平均	533	644	703	650
得点率	53.3	64.4	70.3	65
対24年	-120	-111	+387	+51

昨年度の入試結果における合否度数分布

左から

- 合否検証ライン (合格率が80%、60%、40%、20%と推定される位置にA B C Dを表示) を表示

※昨年度と配点が変わった場合は、今年度の配点に換算して表示。

※表示している画面はイメージ。

生徒への声かけ例

データネットの志望校判定がD判定となり、個別学力検査に向けて弱気になっている生徒に対して

D判定ではあるが、540点を取った君は、C判定に近いD判定だ。昨年度の入試結果における合否度数分布を確認すると、その位置付近からでも逆転合格した先輩は複数人いる。簡単ではないけれど、合格する可能性はあるから、諦めずに頑張ろう！



今号は、大学入学共通テストの結果を踏まえて出願先を検討する生徒に対して、どのような出願指導ツールを用いて、どのような声かけをするとよいかといった出願指導のポイントを解説するとともに、今後の大学入試に向けた学校の課題を展望する。

2025年度大学入試の出願指導ポイントと 今後の大学入試に向けて求められるマインド

出願指導ポイント2 記述模試を基に、個別学力検査を踏まえた合格可能性を見極める

共通テストの得点が芳しくなかった生徒に対しては、ポイント1だけではなく、10月に受験した第2回ベネッセ・駿台記述模試の結果や現時点での自分の状況などを基に、個別学力検査等でどれだけ得点を伸ばせるかを予測したい。データネットの結果(図2)の2次判定には、第2回ベネッセ・駿台記述模試の結果が表示されているので、記述力の確認が可能だ。ドッキング判定では、第2回ベネッセ・駿台記述模試を個別学力検査と見なし、その結果と共通テストの結果を集計した判定も確認できる。

なお、志望校が2段階選抜の実施を予告している場合は、第1段階選抜予想ラインを超えていることを必ず確認しておきたい。

図2 データネットの結果確認画面

※表示している画面はイメージ。

確認ツール

- データネットサイト
- 模擬試験の個人成績票
- Compass など

生徒への声かけ例

データネットの志望校判定を見て、予定通りに第1志望の大学に出願するか、第2志望の大学に変更するか迷っている生徒に対して

どちらの大学の方が個別学力検査で自分の得意教科を生かせそうか、第2回ベネッセ・駿台記述模試の結果と現時点での自分の状況を基に一緒に検討しよう！

出願指導ポイント3 過去の合格者最低点から個別学力検査で必要な得点を逆算する

個別学力検査の目標設定の際の参考にしたいのが、過去の合格者最低点だ。合格者最低点から共通テストの得点を引き、個別学力検査で目指すべき得点を逆算する。

なお、昨年度までと配点が変わっている募集単位については、共通テストの得点を換算する必要がある点に注意したい。過去の合格者最低点に基づいた合格ラインを目標として設定させて、合格するための具体的な学習計画を立てることがポイントだ。

確認ツール

- Benesse High School Online

> 大学入試データ > 一般選抜 > 2024年度入試結果データ > 入試結果データ集 > 国公立大私立大合格者最低点・平均点一覧

※収集ができた募集単位のみ掲載。

生徒への声かけ例

共通テストの結果を踏まえて、個別学力検査での目標得点率を確認しようとしている生徒に対して

君の志望大学・学部の前年度合格者最低点は790.5点。共通テストの配点や平均点変動を踏まえて、共通テストの得点を引くと、個別学力検査で186点が必要だ。個別学力検査で200点をめざすとしたら、目標得点率は64.5%。その数値を目標に、学習計画を立てよう！

データネットサイトのご案内

大学入学共通テスト自己採点集計サービスを基にした実際の分析結果や各種データは随時、データネットサイトにアップされる。実際の動向も参考にしながら、出願検討を行っていただきたい。

各動画・資料は下記2次元コード、もしくはURLより確認できます

- 全体概況 2025年1月23日(木) 9時公開予定 データネットサイトの「動向分析 > 全体概況」より確認。
※東京大学、京都大学、医学科などを分析した「難関大概況」も掲載。
<https://benesse-hs.jp/r5wvs>



動向分析

今年度の大学入学共通テストの全体概況ほか、大学ごとに動向データやトピックスをお届けいたします。

- 全体概況 >
- 難関大学動向 >

出願指導ポイント4 併願対象となる各募集単位の入試科目・配点などを確認

共通テストで特定の教科・科目の結果が芳しくなかった生徒については、併願対象となる各募集単位の入試科目・配点の確認を行うことが重要だ。例えば、横浜市立大学医学部看護学科の前期日程では、25年度入試から3教科型の選抜方式が設けられた。共通テストで1科目失敗してしまった看護学系統志望の生徒にとっては、進学先決定の優先事項次第で、同大学が出願先の選択肢の1つになるだろう。そうした入試科目・配点などの入試変更や共通テストの得点、得意科目などを踏まえて、出願先の検討を行いたい。

図3 入試科目・配点に変更があった募集単位例

大学・学部・学科(日程)	概要
横浜市立大 医・看護(前)	5教科を課す1方式の入試から、A方式(6教科)とB方式(3教科)の2方式での実施に変更する。 出願時の方式選択は不要で、6教科受験の場合は両方式で、3教科受験の場合はB方式のみで合否判定を受ける。

※24年12月までに収集した情報を基に編集部で作成。
※大学のホームページや募集要項等で最新の情報を必ず確認してください。

確認ツール

- Benesse High School Online > 大学入試データ > 一般選抜 > 2025年度入試情報 > 入試科目配点に特徴のある大学一覧



- 教育情報センター YouTube
<https://www.youtube.com/watch?v=fIMvMqPwCvw>



出願指導ポイント5 後期日程の廃止などに伴う出願動向の変化を確認

国公立大学の後期日程の縮小・廃止が続いており、25年度入試でも東京学芸大学や京都工芸繊維大学が後期日程を縮小する。例えば、京都工芸繊維大学の後期日程の受験予定者の多くが名古屋工業大学の後期日程に出願先を変更した場合は、名古屋工業大学の後期日程は例年よりも厳しい入試になることが予想される。後期日程の廃止や募集人員の変更は、併願対象となる大学の入試にも影響を与える可能性があるため、動向を確認した上で出願先を決定したい。

図4 募集人員に変更があった募集単位例

大学	詳細
東京学芸大	後期日程を153人→100人に縮小。新たに総合型選抜(募集人員49人)を実施。
京都工芸繊維大	工芸科学部の一般プログラムで後期日程(74人)を廃止。 前期日程は334人→380人、総合型選抜は63人→67人、学校推薦型選抜は90人→114人に変更。

※24年12月までに収集した情報を基に編集部で作成。
※大学のホームページや募集要項等で最新の情報を必ず確認してください。

確認ツール

- Compass > 判定シミュレーション > 大学検索 > 志望校 AI サーチ (β)

生徒が記入している志望校の、「設置区分」「エリア」「学問系統」などの情報を基に、生徒の志望に合致しそうな志望校を判定ごとに「挑戦校」「現実校」「安全校」に分けて提示することが可能。



※表示している画面はイメージ。

- Benesse High School Online > 大学入試データ > 一般選抜 > 2025年度入試情報 > 入試変更点 > 入試変更点一覧



今後の大学入試に向けて学校に求められること

教育活動を精選しながら、 生徒に伴走する担任の指導力を高める

大学入試が前倒しされる中、 進路指導の方針が必要に

年内入試とも呼ばれる総合型選抜・学校推薦型選抜による入学者の割合が半数を超えたことから分かる通り、大学入試はスケジュールの前倒しが進んでいます。これまで3年生の1学期までに生徒の志望を固めるという学校が大半でしたが、最近は「2年生の3学期にいったん生徒に志望校を仮決めさせて、3年生の1学期に志望理由を磨き上げ



(株)ベネッセコーポレーション
学校カンパニー教育情報センター長
谷本祐一郎 たにもと・ゆういちろう

る」と、指導の前倒しを明言する教師も増えていきます。また、25年度入試から新たに東洋大学が、併願が可能な学力重視型の年内入試を12月初旬に実施し始めましたが、そうした入試方式の増加によって、入試学力の完成という面でも前倒しが進んでいます。

大学入試のスケジュールが前倒しされれば、教師にとっても、やるべきことが短い期間に集中することになります。当然、学校としては取り組みの精選が必要となりますが、そのためには、どんな資質・能力を持った生徒を、どのような教育活動を通じて育てていくのか、その成果を生徒の希望進路の実現にどうつなげていくかといった、学校として育みたい資質・能力を土台にした進路指導の方針が欠かせません。

各校では、スクール・ポリシーを踏まえた教育活動が展開されていますが、進路指導においても、生徒個々の資質・能力を見取り、適切に進路につなげてい

くことが求められます。例えば、進路指導部主催の進路検討会で配布する生徒把握の資料に、教科学力だけでなく、生徒の多面的な資質・能力や興味・関心、目指す進路に関する情報などを盛り込むことで、進路指導の方針が骨太なものになります。また、そうしたことによつて、「この活動は、資質・能力の育成の点からも不可欠だ」と、取り組みの精選が進むでしょう。

探究学習と進路指導を つなげる内省の充実を

進路指導の方針を明確化する際には、探究学習を進路指導とどう関連づけるかも重要です。探究学習も進路指導も、生徒のキャリア形成を支援する点では同じですが、進路指導では主に目指す将来から選択すべき進路を逆算し、探究学習では現在の興味・関心を起点に今後取り組みたいことを積み上げていきます。生徒が自分の長所や生き方・あり方に気づく可能性があるのは、探究学習の実践の中です。探究学習は、未知の可能性、選択肢に出合える場ですから、進路指導と探究学習の両面からキャリアを考えることは、とても意味のあることです。

探究学習などの教育活動の中で自分の可能性に気づくためには、活動を内省する時間が必要不可欠です。しかし、今の生徒たちは経験の機会が多い一方で、内省の時間が少ないと思われれます。自分で、あるいは他者と、じっくりと活動を内省する中でこそ、自分の経験と今、そして将来の目標を自分の言葉でつなげて語ることのできる「マイ・ストーリー」が育まれるのだと思います。

マイ・ストーリーの醸成には、生徒に最も近い存在の1人である担任の力が大きな影響を及ぼします。生徒のマイ・ストーリーの醸成を支援する面談の実現など、進路指導部を中心に、学校として担任の支援をどう行っていくのかも重要な課題です。さらに、マイ・ストーリーを醸成する場として探究学習は非常に有効ですが、探究学習を通して生徒と伴走する担任の資質・能力の向上も、進路指導の充実につながる課題と言えます。

近年、多くの先生方から「共通テストで好成绩を収める生徒は、マイ・ストーリーを語ることができている」と伺います。進路指導と探究学習の両面からマイ・ストーリーの醸成を支援することは、年内入試だけでなく、一般選抜においても成果につながるはずですよ。

お勧めの分掌

管理職

教務担当

進路担当

担任



授業改善に心血を注ぐ北海道高等学校遠隔授業配信センターの取り組みを、本誌 P.10～12 でお伝えしました。「目の前に生徒はいないけれども、できることをやる」。配信という制約を前向きに捉え、課題に挑むことで生まれた気づきや工夫の数々、またその活気。授業を配信されていない読者の先生方にも、参考になったのではないかと思います。

配信する授業以外での生徒との交流も、先生方は大事にされていました。大島恵子先生が受信校に赴いた際に、ある生徒がスマホにつけていたチャームは、ものづくりが得意な生徒の自作でした。その出来栄えに感心し、つい出た「すごい」という賛辞が生徒の心に残ったようで、後日、大島先生に生徒からチャームが届けられました（写真）。永遠に忘れたくない思い出も、一瞬の積み重ね。きっと生徒の心のアルバムには、センターの先生との写真もたくさん貼られているのだと思います。そうした時間の堆積があって、画面越しの授業は臨場感を増し、センターは「母校」の1つになるのでしょう。（河野）

VIEWnext公式アカウント

LINE@

友だち募集中!



『VIEW next』のLINEを友だち登録しただけであれば、本誌の発刊時や新コンテンツの公開時に通知が届き、ウェブサイト『VIEW next ONLINE』内の該当記事に、ダイレクトにアクセスできます。この機会にぜひ、友だち登録をお願いします!

【友だち登録の方法例】

- (方法①) 上の2次元コードを読み取る
- (方法②) LINEアプリの「友だち追加」> 「ID検索」で「@view21」と入力して追加

VIEWnext

高校版 2025年4月号

4月18日発刊

(予定)

Reader's VIEW

先生方からのご意見を
紹介します

2024年10月号へのご意見

記事の図を使い、「自己調整学習」とは何かを生徒に説明

10月号の特集の九州大学大学院の伊藤崇達^{たかみち}准教授の記事は、論理的で非常に分かりやすかった。早速、生徒に自己調整学習のサイクルやその大切さを、図1を用いて説明した。負の連鎖にある生徒も、自分の状況を把握し、意思コントロールの大切さを理解したようだった。高校は、「学習」を通じて生徒に学び続ける力を育てている。その力が身につけば、社会人になっても常に自己を調整し、仕事も頑張れるだろう。生徒に自己調整について考えさせることが大切だ。愛媛県・私立松山聖陵高校 大谷修一

教師が目的を持って指導する重要性を再認識

10月号の特集の九州大学大学院の伊藤准教授の記事を読み、自己調整学習の基礎を知ることができた。図1の「自己調整学習のサイクルが回っていない生徒」が例えば「やる気が出ない」場合は、授業の内容をその日のうちに復習できるプリントを配布するなど、生徒にどう働きかければよいかをイメージできた。図3は、「4.自己調整レベル」に徐々に近づけることの重要性を理解できた。教師が日頃から目的を持って指導することが、生徒の成長につながるのだと再認識した。静岡県 匿名希望

様々な教科の授業事例から、実践のヒントを得た

自己調整学習を授業にどう取り入れるか、試行錯誤している。10月号の特集で紹介された様々な教科の授業事例から、新しい試みのヒントをもらった。特に授業事例1・東京都立多摩高校の記事で、前時と本時とのタイムラグを活用して「問いのステップ」の解説を行う方法は、じっくり取り組みたい生徒とどんどん先に進めたい生徒の両方に対応できるよい方法だと思った。兵庫県立伊丹高校 松浦雅代

生徒が自ら問題に取り組む姿勢を持ち続けられる授業を

10月号の特集の記事から、「主体的に学習に取り組む態度」の評価方法のヒントを得た。生徒が自分の意思で学習に取り組み、計画を修正しながら進める自己調整学習についてももっと研究したい。また、授業事例3・長崎県立諫早高校の記事にあった「多くの教師が、『よい授業をしたら、生徒は1回の授業で学習内容を理解できる』と思っているのではないか」という言葉に強く共感した。私も、生徒は分かったつもりで、本当は理解できていないのではないかと常々思っていた。振り返りのテストで正しい答えを書けていないからだ。教師が自己満足する授業にせず、生徒に常に問いかけ、知的好奇心を刺激し、自ら問題に取り組む姿勢を持たせ続けることが、教師の役割ではないか。徳島県立総合教育センター 牧野浩章

評価方法を定期的に見直し、評価の信頼性を高めたい

10月号の「事例で深める! 学習評価」の静岡県立静岡東高校の記事を読み、観点別学習状況の評価の結果を評定に総括する際の3観点の組み合わせを13通りのみし、それ以外の組み合わせとなった時は、教師が評価結果を見直し中で、自分の授業や評価方法において改善すべき点に気づき、実際に改善するきっかけになっている取り組みが参考になった。評価の客観性や信頼性の向上を目指し、現任校でも学習評価の改善に取り組みたいと思わせてくれた記事だった。栃木県立今市高校 半田高史



福井大学連合教職大学院 教授、
独立行政法人教職員支援機構 フェロー
中森 一郎 先生



VIEW next 編集部 統括責任者
柏木 崇

オンラインセミナー

対談 登壇予定

本オンラインセミナーでは、お申し込み時のアンケート(2025年2月17日受け付け分まで)において多くいただいたご質問にお応えします。

本誌の特集に対する
もっと知りたい
もっと聞きたい
にセミナーで
お応えします。



本誌特集

生徒の学びの機会をどう保障するか？

— 多様化する生徒、学びを組織的に支援するための視点とリーダーシップ

参加費無料

Session 1
特集解説

生徒の学びの機会を保障する上での課題と先進事例

Session 2
対談

多様化する生徒、学びを組織的に支援するための管理職の視点とアクション
(お申し込み時にいただいたご質問への回答を含むセッションとなります)

※プログラムの内容は変更になる可能性があります。あらかじめご了承ください。

開催日時

2025年 3月18日(火)
15時30分～17時00分

形式

オンライン (Zoom 配信)

※お申し込みいただいた方に、詳しい参加方法をご案内します。
※登壇者の都合等により、配信内に録画再生を含む場合があります。

参加申し込み方法

右の2次元コード、
または下記URLからお申し込みください。
<https://benesse-hs.jp/z7xv3>



参加申し込み締め切り

2025年3月14日(金)



生徒と創る学びの情景

全員と、一人ひとりと

大阪府・私立^{せんしん}宣真高校 上田 誠先生

「多様な進路の生徒がいる本校の進路講話では、すべての生徒が自分事と捉え、将来を前向きに考えられるように話すことを心がけています」と語る上田先生。昨年の1月に行った、2年生対象の進路学習の授業では、ラジオのお悩み相談室という設定で、生徒が進路希望調査に書いた悩みに上田先生が答える動画を製作して流した。「選んだ進路が自分に向いているのか不安で、分からなくなってきました」という悩みに、「悩みを抱えたままのあなたで大丈夫。そんなあなただからこそ、目の前のものを大切にすることができるはずですよ」と答えた。現在3年生となった生徒は、「自分のことかなと思って、先生の言葉がずっと入ってきました」と振り返る。

生徒全員と向き合う一方で、生徒が自分らしい生き方をできるように、一人ひとりにも寄り添う。上田先生に小論文の作成について相談した看護学科志望の生徒は、「チーム医療や安楽死についてどう考えるかを先生と話すうちに、私が目指したい看護のあり方が見えてきました」と、自身の変化を語る。「大切なのは、自分がどうありたいか。その答えは生徒の中にしかありません。生徒が自分でそれに気づけるよう、これからも生徒に向き合い、寄り添い続ける教員でありたいと思っています」。

うえだ・まこと 同校に赴任して17年目。進路指導部長。国語科。

大阪府・私立宣真高校 1920（大正9）年設立／全日制／普通科／女子校／1学年約350人／2023年度卒業生進路実績 国公立大は、神戸市外国語大に1人が合格。私立大は、龍谷大、関西大、近畿大、桃山学院大などに延べ130人が合格。短大・専門学校進学180人。就職30人。